

中国初の民営生態博物館の現状と課題 : 運営主体と観光形態の考察を中心として

DIAO, Yi / 刁, 芸

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2019-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2019-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

修士論文

指導教授 曾 士才 教授

論文題名

中国初の民営生態博物館の現状と課題
-運営主体と観光形態の考察を中心として-

国際文化研究科
国際文化専攻 修士課程
氏名 刁 芸

論文要旨

国際文化研究科国際文化専攻 刁芸
指導教授 曾士才教授

本研究は、先進国であるフランスで生まれた生態博物館の概念と実践が中国の貧困地帯である貴州省でどのように受容され、展開していたのかを考察し、主に、中国初の民営生態博物館の運営主体と生態博物館が展開している地域の観光形態の現状と課題を明らかにした。また、官営の隆里古城生態博物館の現状を比較参照しながら見た。

20世紀80年代後半から、貴州省をはじめ中国南西部では、少数民族の生活と文化を観光の対象とする民族観光がおり、地域の貧困救済と振興が期待されている。しかし、経済発展を最優先する観光開発によって自然環境の破壊が起こった。こうした背景下において、地域の自然環境、文化環境、人々の営みを丸ごと博物館と見なして保護するとともに、それを中心とする観光業につなげていこうという生態博物館の理念が中国に導入されてきた。そして、六枝梭戛、花溪鎮山、隆里古城、堂安の四ヶ所に政府主導の生態博物館が設立した。それに対し、2005年に中国初の民営の地湄侗族人文生態博物館を設立された。これまで中国で作成された生態博物館が「政府主導」という特色があり、地湄侗族人文生態博物館は唯一の民営の生態博物館として非常に興味深いと考えられる。

「我々がやりたいのは、地湄侗族人文生態博物館の設立によって、文化保護と地域発展を結びつけ、生態博物館の模範になること」を地湄侗族人文生態博物館館長である任和昕は述べている。しかし、民族文化の審判者として、国家が最も大きな役割を果たしている中国では、民営生態博物館では、村民は主人公になれるのか、あるいは、資金や専門家による管理などの面で、民営博物館は、国家より柔軟な管理ができるのかという疑問が浮かぶ。

以上の問題意識を背景に、本研究は2つの生態博物館をめぐり、文化遺産の維持・発展・展示の機能を持つ資料信息中心（ドキュメンテーションセンター）の運営管理、生態博物館による文化保護の仕方、および生態博物館の理念と観光開発の関係や実態を明らかにしたい。特に、官営生態博物館が国家主導で運営管理されてきたのに対し、民営生態博物館はどのように独自の道を歩んできたのか。あるいは、館長である任和昕が期待した通り、地湄侗族人文生態博物館は生態博物館の模範になれるのかを検証する。

上記の研究目的を達成するため、研究方法として、文献研究、実地調査を用いる。そして、筆者は2017年2月、8月、2018年2月の3回（1回目は事前調査を行った）貴州省に足を運んで実地調査を実施した。

本研究の構成は以下の通りである。

序章においては、問題意識を提起するとともに本研究の目的を明らかにする。

第1章では生態博物館の定義、歴史背景、理念、そして、世界における生態博物館の実践、特に日本における生態博物館の実践を紹介する。

第2章では生態博物館が中国に導入された経緯、中国における生態博物館の設置原則および全国での生態博物館の展開を紹介する。

第3章では文献研究、フィールドワークの結果に基づき、隆里古城と地扞村の歴史、生態博物館の成立した経緯などの全体像を明らかにし、特に資料信息中心の運営管理、文化保護、観光活動を考察する。隆里と地扞では、それぞれの文化の保護・伝承はどのように行われたのか、村人は生態博物館に関連する活動の中でどういう役割を果たしたのか明らかにする。また、生態博物館という理念のもとに、貧困からの脱却を目的とする観光開発の実態、特徴及び外部者の参与を解明する。最後に生態博物館の運営管理、成果、直面した問題などについて、官営生態博物館と民営生態博物館の比較を行う。最終章では、民営生態博物館の運営現状を本研究の問いへの結論とし、国家のコントロールのもと、民営生態博物館が民営企業の主導でこれまでどのように歩んできたのか、現状がどうなのか、これからどう歩んでいくのかを述べ、本研究の問いに対する答えとする。

終章においては、各章の議論を振り返りながら総括する。述べられたことから導かれる結論、限界また今後の課題について触れることで本研究の締めくくりとする。

これまであまり考察されてこなかった民営の地扞の生態博物館について、以下のことが明確にした。

地扞の生態博物館の力だけにより、地域の経済的発展に影響を与えるのは非常に限られている。また、地域住民はまだ観光活動から経済的に潤ってはいない。しかし、貴州省における他の生態博物館と比べると、民営である地扞の方は、部分的にはあるが、住民が運営の主体になったり、種々の専門集団や個人が運営、企画に関わったりしており、観光形態でもMICEや体験型観光などユニークな取り組みを行っており、継続性、柔軟性を持っているといえよう。しかし、現在のところ、地扞侗族人文生態博物館は生態博物館のモデルになるとはまだ言えないでいる。

中国初の民営生態博物館の現状と課題
-運営主体と観光形態の考察を中心として-

目次

序章.....	3
1. 研究背景.....	3
2. 先行研究.....	4
3. 研究の目的・対象・方法.....	6
第一章 エコミュージアムの理念と実践.....	8
第一節 エコミュージアムの理念.....	8
1. 歴史背景と誕生した経緯.....	8
2. エコミュージアムの定義.....	8
3. 伝統的な博物館との差異.....	9
第二節 エコミュージアムの実践.....	10
1. 欧米における実践.....	10
2. 日本における実践.....	12
第二章 中国における生態博物館の発展と実践.....	16
第一節 中国における生態博物館の導入.....	16
1. 生態博物館の理念の導入の経緯.....	16
2. 中国における初の生態博物館の誕生.....	16
3. 生態博物館の運営原則である「六枝原則」.....	16
第二節 中国における生態博物館の展開.....	17
1. 第1期生態博物館である貴州生態博物館群.....	16
2. 第2期生態博物館である広西生態博物館群.....	18
3. 第3期生態博物館である浙江生態博物館群.....	20
第三節 中国における生態博物館の特徴.....	20
第三章 貴州省における生態博物館の理念の実践.....	22
第一節 隆里古城の概況.....	22
1. 隆里の地理、歴史概要.....	22
2. 隆里古城の文化資源、観光目玉.....	22
第二節 隆里古城生態博物館の成立.....	23
1. 生態博物館の設立の経緯.....	23
2. 資料信息中心の運営管理及び生態博物館への住民参加.....	23

3. 観光開発の現状.....	24
第三節 地捫の概況.....	26
1. 地捫の地理、行政概要.....	26
2. 地捫村の形成.....	27
3. 地捫侗族の生産生活及び文化習俗.....	27
第四節 地捫人文侗族生態博物館の成立.....	29
1. 成立の経緯.....	29
2. 資料信息中心の運営管理及び生態博物館への住民参加.....	32
3. 観光活動の現状.....	39
終章.....	46
1. 本研究のまとめ.....	46
2. 全体的考察・今後の課題.....	48
参考文献.....	52

序章

本研究は、先進国であるフランスで生まれた生態博物館の概念と実践が中国の貧困地帯である貴州省でどのように受容され、展開していたのかを考察し、主に、中国初の民営生態博物館の運営主体と生態博物館が展開している地域の観光形態の現状と課題を明らかにしたい。また、官営の隆里古城生態博物館の現状を参照しながら見てみたい。

生態博物館の中国への導入

20世紀80年代後半から、貴州省をはじめ中国南西部では、少数民族の生活と文化的事象を観光の対象とする民族観光がおこり、貧困救済と地域振興が期待されている。それまで国家建設への障害とみなされ、古く、打ち壊すべき民族文化は、新たに注目され、認められる時代に入り始めた（曾 1998）。「郎徳上寨」という苗族（ミャオ族）の村のように観光客を歓迎する態勢を作っている民族観光村や「紅楓湖民族旅游村」のような観光客の娯楽志向に合わせ、アトラクションを開催するテーマパークなど様々な方法で観光客を引き寄せている。このように、地方政府は少数民族文化などの資源を掘り出し、「民族風情」を特徴とする民族観光活動を通して、村民たちに収入をもたらし、地元で新しい経済的なチャンスを提供しようとしてきた。一方、1978年改革開放以来、中国の経済は急速な成長を遂げ、特に、東部沿岸地域の発展は目覚ましい。しかし、農民の多い内陸地域の貧困問題は中国が抱える大きな問題である。貧困救済をするうちに、過度の観光開発による問題を引き起こしている。すなわち、経済発展を最優先する観光開発が自然環境を破壊している。

90年代になると、生態博物館という概念が中国へ導入され発展してきた。生態博物館とはフランスで生まれたエコミュージアムの訳語である（以下、「生態博物館」の表記を用いる）。中国国家博物館の研究員であり、中国生態博物館設立の中心人物である蘇東海によると、生態博物館とは、「自然環境、伝統文化、地域住民の生活をはじめとする地域の全ての物事を保存の対象とし、コミュニティそのものをまるごと博物館と見立てた一種の地域保存」の概念である（蘇 2001）。1998年、貴州省はノルウェーの支援のもとに、貴州省六枝特区の梭戛苗族の独特な伝統文化と自然環境の保存、保護を目的で、六枝梭戛生態博物館を設立した。その後、貴州省では、鎮山布依族生態博物館、錦屏隆里生態博物館、黎平県堂安生態博物館の三つの官営生態博物館が相次いで設立された。これまでに、貴州省で上述の四箇所の地域の文化遺産を保護、継承、発展することを核心とする官営生態博物館が誕生していた。また、2005年には貴州省黔东南苗族侗族自治州黎平県に香港明德創意集団による初の民営地擘侗族人文生態博物館が設立された。

生態博物館による文化保護と観光開発

村などをまるごと文化遺産として保護するとともに、それを中心とする観光業を成立させ村民の生活を豊かにしようとする試みが展開されつつある。

曾士才（2009）は西南中国の民族観光の形態は大きく3つに分けることができると指摘している。1つは民族文化生態村を舞台にした観光であり、1つは都市や都市近郊における民族のテーママークやエスニックレストランである。3つ目の生態博物館による民族観光は、エスニックからエコへ、点の観光スポットから面の観光エリアへと変えていく新しい形態の民族観光と言えよう。しかし、「文化遺産の保護と文化資源を活用した観光開発、経済発展との調和をどう図るかが大きな課題になっている」（曾 2016）。

経済の発展と交通インフラの整備に伴い、世間から離れていた内陸の民族地域は外来文化によるインパクトを受け、自然環境だけではなく、生活スタイルや民族文化は消滅の危機に直面している。こうした危機に際して、中国政府と学者が期待している「自然、文化を保護する新しい方法」としての生態博物館はどのような役割を果たしていたのかが興味深い。

民営生態博物館への疑問

「我々がやりたいのは、地擘人文生態博物館の設立によって、文化保護と地域発展を結びつけ、生態博物館の模範になること」を地擘人文生態博物館館長である任和昕は述べている。しかし、民族文化の審判者として、国家が最も大きな役割を果たしている中国では、民営生態博物館では、村民は主人公になれるのか、あるいは、資金や専門家による管理などの面で、民営博物館は、国家より柔軟な管理ができるのかという疑問が浮かぶ。また、地元である黎平県人民政府ホームページには「地擘侗族人文生態博物館はエコツーリズムにつながる橋を架け渡しており、文化保護と農村エコツーリズムの発展を促進させ、新しい流れが開かれた」（黎平県人民政府ホームページ 2016年8月20日）とあるが、2016年7月から始まった地擘侗族人文生態博物館コミュニティにおける観光開発が未だに途上にある。本稿では、関係者の議論、考え、それにこれまで行ってきた活動を取り上げ、生態博物館の理念は観光開発にどのような影響を与えてきたのかを分析したい。この点が、本研究の1つの意義である。

先行研究

生態博物館はコミュニティ全体をまるごと保護することに重点を置き、コミュニティの自然環境、文化財、管理制度などの各分野に及んでいるため、中国では博物館学、民族学（人類学）、建築学、管理学など多様な領域からの関心が寄せられている。

博物館学から見ると、生態博物館の理念が誕生したのはポスト工業化の時代の都市からであるため、中国でいかにしてこの概念が生存、発展していけるか、すなわちいかに「中国化」の道を歩むのかに対して、黄春雨（2001）は、「まず、中国の環境と風土をよく認識しなければならない。そうすることによってのみ、外部からの知識の導入や方法の活用できる健全な成長と発展の道を模索することができる」と述べている。また、梭戛生態博物館の創始者であり、元貴州文化庁文物処処長である胡朝相（2000）は「中国で生態博物館の設立は政府と離れることができず、政府が導き手とならなければならない。これは我が国の政治体制によって決められたことである」、「政府を導き手とすること及び政府からの財政の支援は非物質文化遺産保護の重要な保障である」と述べている。鐘経緯（2018）の博士論文では、博物館学の視点から、貴州省と広西省の八箇所の生態博物館を対象に調査を行い、「新たに生態博物館を建設するよりすでに建設された生態博物館の運営管理を充実させることが重要である」と指摘した。

民族学（人類学）から見ると、張曉松は「梭戛生態博物館における歴史任務、管理方式、未来の発展方向に対し、立場の異なる人々が異なる観点を持っている」と鋭く指摘している。ジョン・エイジ・ジェストロンを代表する国際生態博物館学者が、文化保護、文化純潔性の維持を第1の任務だと考えている一方、中国生態博物館の学者は、箐苗（梭戛の苗族のこと）は伝統文化の純潔性を続けて維持する以外、外部から多くの知識を学び、理性的に自民族の文化自覚意識を高めるべきだという考えだ。しかし、箐苗の人々にとって、経済発展の願いは非常に強いのである。この矛盾は、その後の生態博物館発展のジレンマを示唆している。すなわち、地元民の自民族文化への関心は薄く、生活を豊かにしたいという願いのほうが強いということである（張 2000）。

そのため、「梭戛生態博物館は、すでに徹底的に観光化しており、他の民族村よりさらに観光化が進んでいる」（潘 2006）と指摘する人もいる。同じように、鎮山布依族生態博物館の観光化も進んでいる。村民たちは「農家楽」を営み、観光客の興味にひたすら迎合するため、マージャン牌を設置し、夜になると、観光客が徹夜マージャンをする（劉 2010）。中国政府は、初の生態博物館を設立するに際して、9つの理念を含む「六枝原則」を打ち出した。その中で、最も核心となる1つは、「民衆による参与と、民主的管理方式を用いる必要がある」という原則だ。しかし、実は、地元民の文化自覚の意識は薄く、生態博物館への認識や参与が足りないとのことが分かってきた。尹紹亭は村民が自民族文化の“担い手”ないし「六枝原則」の中の「参与者」ではなく、単なる“傍観者”のように存在していることが最大の欠点だと指摘している（尹 2009）。

以上の先行文献を見ると、経済的に貧しく人々の教育のレベルの低い貴州省では、生態博物館の建設は政府の力と離れることができない背景の下に、民営の生態博物館は一体ど

ういう運営方式をとっており、または政府とどういう関係を取っているのかがまだ明確ではないのである。また、観光開発において、文化の保全・継承、観光と絡めながらどうやって進めていくのかを探りたい。

研究目的

本研究は2つの生態博物館をめぐり、文化遺産の維持・発展・展示の機能を持つ資料信息中心（ドキュメンテーションセンター）の運営管理、生態博物館による文化保護の仕方、および生態博物館の理念と観光開発の関係や実態を明らかにしたい。特に、官営生態博物館が国家主導で運営管理されてきたのに対し、民営生態博物館はどのように独自の道を歩んできたのか。あるいは、館長である任和昕が期待した通り、地攄侗族人文生態博物館は生態博物館の模範になれるのかを検証する。

研究対象

本研究は中国の貴州省における隆里古城生態博物館と地攄侗族人文生態博物館を中心に考察するものである。この2つの生態博物館を選ぶ理由は、2つがある。まず、隆里古城生態博物館は官営生態博物館では、村民の参加度が一番高いと思われるからである。そして、隆里古城生態博物館と地攄侗族人文生態博物館は地理的には近いため、フィールドワークを実施しやすかったからである。

研究方法

1. 文献研究

大学の図書館、CINII（中国の知網）や中国の知網を利用し、生態博物館および文化保護、民族観光に関する先行研究を収集、分析、整理する。生態博物館の理念、世界における生態博物館の実践、特に中国の生態博物館の歴史背景、実践過程などの側面から検討を行った。

2. 現地調査

貴州省における生態博物館の地域環境、設立条件、運営状況、外部者の参加、村人の対応などを把握するため、筆者は2017年2月、8月、2018年2月の3回（1回目は事前調査を行った）貴州省に足を運んで現地調査を実施した。地元県（郷）政府の幹部、生態博物館の関連者、外部者（主に地元で地域開発を行う人々たち）、村人、観光客など聞き取り調査を行った。調査の中心地は民営生態博物館のある地攄村と官営生態博物館のある隆里郷である。

論文の構成

第1章では定義、歴史背景、全体像面から生態博物館の理念と実践を説明し、世界における生態博物館の実践、特に日本における生態博物館の実践を紹介する。第2章では生態博物館が中国に導入された経緯、中国における生態博物館の設置原則および全国での生態博物館の展開を紹介する。第3章では文献研究、フィールドワークの結果に基づき、隆里古城と地捫村の歴史、生態博物館の成立した経緯などの全体像を明らかにし、特に資料信息中心の運営管理、文化保護、観光活動を考察する。隆里と地捫では、それぞれの文化の保護・伝承はどのように行われたのか、村人は生態博物館に関連する活動の中でどのような役割を果たしたのか明らかにする。また、生態博物館という理念のもとに、貧困救済のため、観光開発の実態、特徴及び外部者の参与を解明する。最後に生態博物館の運営管理、成果、直面した問題などの面から官営生態博物館と民営生態博物館の比較を行う。最終章では、民営生態博物館の運営現状を本研究の問いへの結論とし、国家のコントロールのもと、民営生態博物館が民営企業の主導でこれまでどのように歩んできたのか、現状がどうなのか、これからどう歩んでいくのかを述べ、本研究の問いに対する答えとする。

第一章：エコミュージアムの理念と実践

第一節 エコミュージアムの理念

1. 歴史背景と誕生した経緯

エコミュージアムは、仏語のエコミュゼの英語訳である。エコミュージアムとは何か、その理念を説明する前に、まずエコミュージアム誕生の歴史背景を探ってみよう。

1960年代のフランスは、中央集権制度により、中央と地方の地域格差が拡大し、地方が疲弊してしまう形勢であった。さらに、都市部への人口の流入に伴い、農村部の過疎化が著しくなった。こうした背景の下に、地方分権主義が台頭してきた。地域振興および地方自治といった試みが見られるようになった。

1963年から、中央集権の分散化の一つの政策として、国土整備政策が施行された。国土全体を整備する中で地方自然公園は自然遺産や文化遺産の保護、景観の保護、経済活動の持続、地域生活の活性化などの使命を与えられたが、地方にとって観光による活性化の場であり、都会の人々のリラックスの場でもある。エコミュージアムの父といえるジョルジュ・アンリ・リヴィエールは従来の博物館に疑問を持ち、根本的な改革の研究に着手した。彼は農村建築を現地で保存し、さらに環境と人間の間を探求するということを提出した。その後、各地で実践し、環境と人間の関わりを考えていく「エコミュージアム」の原型を誕生させたのである。

農村部の過疎化や農業活動の衰退が、地方の自然公園内の多くのエコミュージアムの出現の原因になった。また、伝統産業の衰退と消滅は鉱工業地域におけるエコミュージアムの出現を促進することになった。1977年後半、地方都市の産業・文化・生活にかかわる諸々の記憶を収集、保全するエコミュージアムも出現した。

エコミュージアムという言葉の名づけ親であるユグ・ド・ヴァリーンによると、この言葉ができたのはパリ市内のレストランで彼、リヴィエールを含む3人が食事をとっていたときに生まれたのである。

2. エコミュージアムの定義

エコミュージアムの父と呼ばれるリヴィエールが作成した定義は、「発展的定義」と呼ばれ、以下のように述べる。

機能としては、

- ①住民が自らを認識するための鏡であり、エコミュージアムの展示と活動を通して、住民に自分たちをよりよく知ってもらおう。
- ②地域の環境と人々との関係を表現できる場である。
- ③時間と空間中に生きている住民の姿を表現することができる。

そして、エコミュージアムの任務として、以下のことが求められている。

- ①研究所であり、外部の研究機関と協力して、住民の生活、環境を研究し、貢献する。
- ②保存機関であり、自然・文化・産業遺産を保存し、活用する。
- ③学校であり、住民を研究・保存活動に参加させたり、住民に自らの未来の諸問題をよりよく把握するように促進する。

3. 伝統的博物館との差異

エコミュージアムの構成は主にコア・ミュージアム（エコミュージアムの本部）、テリトリー、サテライト・ミュージアムとディスカバリー・トレイル（発見の小径）の4つの要素から成り立っている。その中に、サテライトはアンテナまたはサイトと呼んでいる。異なるエコミュージアムの呼び方も異なる。コア・ミュージアムというのは、ドキュメンテーションセンターとも言うが、いわゆる従来型の博物館のような、色々なものを収集して、パネル展示を行い、説明するような博物館のことである。それに対し、サテライトというのは、村にあった元々の施設というのをサテライトと読んで、観光客が見学できる場所である。

エコミュージアムをより深く理解するために、伝統的な博物館とエコミュージアムの差異を明確にすることは不可欠だと考えられる。以下の表を通して、主に目的、場所、対象、運営主体についてそれぞれを比較してみる。

表1 伝統型の博物館とエコミュージアムの異同

項目	伝統型の博物館	エコミュージアム
目的	国民の教育、学術及び文化の発展に寄与する ¹	地域社会の人々の生活と、そこの自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自然、文化、産業遺産等を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与する
場所	収集・展示品を建物・施設内に保管し展示する	地域の自然、文化、遺産を現地で保存し展示する
利用対象	一般大衆	住民と地域外の住民
運営主体	設置者主体の管理・運営	行政、住民が一体となる管理・運営

¹ 日本の博物館法（昭和26年）第1条による。

すなわち、エコミュージアムは伝統型博物館のように建物内の場に制限せず、文化を閉じ込める静態的な文化を保護する方式と異なり、住民の参加によりある地域の自然、文化、遺産を現地で保存、保護する一種の時代の変化に合わせる方式である。

第二節：エコミュージアムの実践

1. 北欧における実践

1960年代、フランスでエコミュージアムが生まれた。1995年時点では、フランスではエコミュージアムは66あり、そのうち31が文化省認定を受けている。これらのエコミュージアムは、歴史・文化・地理・経済の面からそれぞれ地域の多様さを反映している。例えば、熟練仕事・セーヌ川の活動・林檎（バス・セーヌエコミュージアム）、田舎遺産と工業遺産（フルミエコミュージアム）、都市化・地方の歴史・人間と環境（フレンヌエコミュージアム）、田舎文化の証言（グランド・ランドエコミュージアム）、海辺の環境と生活・島社会（グロワ島エコミュージアム）、森・職人（ランスエコミュージアム）、鉄道遺産・都市化・建物（サンカンタン・ヴリンエコミュージアム）、民俗芸能・レース・葡萄農園労働・穴居生活（カントン・ドゥ・ヴヴライエコミュージアム）、田舎の住居・農業活動と前工業活動・採掘坑（オート・アルザスエコミュージアム）（岩橋 1996）などがあり、その地域の特性によって設定されている。

エコミュージアムは最初にフランス圏に伝搬した。そしてラテンアメリカで展開し、最近ではアジアにおける展開が期待されている。初めて中国で展開していた際に、中国政府とノルウェー政府は共同プロジェクトに調印し、トーテン・エコミュージアムの館長で、ノルウェーにおけるエコミュージアム運動の中心的存在であるヨン・イエストルムも貴州省の生態博物館の設立に参加した。

以下、エコミュージアムの発祥地フランスにおける代表例とノルウェーのトーテン・エコミュージアムの例を紹介したい。

(1) ブレス・ブルギニョン・エコミュージアム（日本エコミュージアム研究会 1997）

ブレス・ブルギニョン・エコミュージアムは、フランス東部、パリの東南部に位置していた。ブレス・ブルギニョン地域は1690平方キロメートル、115の市町村を含み、住民約7万人を有していた。緩やかな起伏に富んだ地形、森林があり、農地が広がる農村地帯であった。フランス国内における他の多くの農村と同様、この地方では、若者の流出、経済の苦境、農業市場の変化などのため、ブレス・ブルギニョン地域は新たな活動や収益性を見込める農業の方法を探求することになり、自らの文化的遺産を捨て去ることなく地域の経済機能を発展させようとしていた。

ブレス・ブルギニョン・エコミュージアムはコア施設と見られるビエール・ド・ブレス城と6つのサテライト（森と木の館、小麦とパンの館、新聞社、ブドウとワインの館、農業の博物館、わら椅子の博物館、ジュイフの古い民家）と7つの水車小屋からなる発見コースによって構成されている。

ブレス・ブルギニョン・エコミュージアムの管理人員は常勤スタッフと臨時スタッフ合計15人によって編成されている。常勤スタッフは学芸員、研究員、展示技術員、会計、資料収集員、広報係、受付事務があり、必要に応じて研究員、教育者、協力者、期間スタッフなどを受け入れる。

毎年企画展を実施しているとともに、各省庁や大学などと協力して学術研究を行なっている。各サテライトは独自に活動を行い、中心施設から職員の派遣などは行われない。各アンテナは多様な主体により自発的に活動に支えられている。

例えば、森と木の博物館には50人以上のボランティアの人が活発にサテライトの活動に協力している。その中に、学校教師以外、森で働いていた人などが多いという。農業のサテライトはアソシエーション（支援組織）に支え、学校からの先生たちもボランティアスタッフとして協力している。

ブレス・ブルギニョン・エコミュージアムは様々な財源によって成り立っている。国、地方の支援、個人、企業の寄付または45%の自己資金（入館料、アソシエーション会費など）がある。

エコミュージアムの観光形態はコアとなる施設、複数のサテライト、発見小径となどの遺産を含めた観光資源を巡るルートとなる。これらは「観光もてなし組織」によって管理されている。エコミュージアムはこの組織と密接な連携をとって観光誘客を図っている。

農村地域であるブレス・ブルギニョンは、歴史資源、建築的資源、科学的資源、技術的資源などを有している。エコミュージアムの成立を通じて、地域の人々の生活の記憶全般に及んでいる資源を系統的に集めて、研究、保存、活用し、地域社会に開放する。

エコミュージアムの運営は住民と行政の同時入力という二重入力方式で、行政側が運営資金などの面で運営に助力している。さらに、学芸員、教育者、展示技術者などといった専門性を持つ人員があり、地域住民が積極的に参加しながら、様々な支援組織も協力している。つまり、多様な運営主体により、ブレス・ブルギニョン・エコミュージアムは成り立っている。

(2) ノルウェー：トーテン・エコミュージアム（農村環境整備センター 1999）

トーテン・エコミュージアムはノルウェーの首都オスロの北部約 70 キロメートル、シューサというノルウェーで一番大きな湖の西に位置する。その範囲は、東西 2 つのコミューンからなる 7 つの地域からなり、面積は約 800 平方キロメートルである。

地域特性として、約 5000 年以上も前にここに住んでいた遊牧民の跡があり、400～1000 年頃にかけての埋葬者の塚が 90 もある。また、中世に建てられた石造りの教会が 2 つある。ここはノルウェー有数の農業地帯であり、ハクサイ、カリフラワー、ジャガイモ等を生産し、特に赤カブはノルウェー全体の 9 割を生産している。

トーテン・エコミュージアムは、トーテン歴史協会従業員と民間ボランティアによって管理運営されている。年間の活動予算は、国、郡、および自治体からの補助金があり、全体の 62% を占める。また、書籍、記念品、入場料などの収入もある。人件費も膨大ため、運営は厳しい。

プロフェッショナルなスタッフとボランティアの人たちが協力してクリエイティブな活動をしている。また、博物館のスタッフがある事柄において専門的な知識を持たず、逆に地域住民の中にその知識を持っている者がいる場合もある。トーテン・エコミュージアムの場合、地元住民との関わりを密にしているだけでなく、内発的な自発性を触発していくのも重要な点であり、それが博物館の力になっている。

トーテン・エコミュージアムは「人と景観がどのように一緒に発展してきたのか」ということを示すエコミュージアムである。6 つのサイトがあり、入場者は年間平均 1 万 2000 人である。

6 つのサイトは、カップ牛乳工場、ペデル・バルケ・センター、スタンベリ野外民家博物館、ルード学校、ラウフォッス工場とゲリラ小屋である。

トーテン・エコミュージアムでは、地域住民が主体的にコミュニティの文化保護・継承・発展を担っている。中国における初期の生態博物館の設置原則、あるいは憲章と言える「六枝原則」の「村民が文化の主人公であり、その文化を認識し解釈する権利を持つ」という点はトーテン・エコミュージアムの精神を反映している。

2. 日本における実践

(1) 日本におけるエコミュージアムの推進

「エコミュージアム」という概念を初めて日本に紹介した人物は鶴田総一郎であった。鶴田氏は「環境の博物館」という訳語で日本に紹介したが、当時この概念を認める人は少なかった。その後、1986 年から博物館学者の新井重三は力を入れてエコミュージアムの概

念及び事例を紹介し、研究会やシンポジウムなども開催するようになった。このようにして、エコミュージアムという概念は徐々に日本全国で広がっていった。

日本で最初にこの概念を実践し始めたのは山形県の朝日町である。朝日町のエコミュージアムが展開する地域は、豊かな自然資源と文化資源が残る中山間の農村地域である。これは、中国貴州省に展開している生態博物館の管轄地域に似ている。朝日町のエコミュージアムは行政と NPO 法人朝日町エコミュージアム協会、すなわち民間非営利組織を運営主体として活動している。町にある自然を生かし、共生できるような観光地づくりの観光活動も積極的に行われている。

朝日町のエコミュージアムについて、以下に紹介する。

(2) 山形県朝日町におけるエコミュージアムの活動（田林明、横山貴史、大石貴之、栗林賢 2011）

朝日町は山形県の南西部に位置し、豊かな自然が残る中山間の農村地域である。山林原野が 76% を占め、農地が 12.4% を占める。日本一美味しいと言われるリンゴ栽培が盛んである。朝日町は、朝日連峰をはじめとする自然景観だけではなく、国の重要歴史・文化財である佐竹家住宅や豊龍神社など文化景観も豊かな町である。1955 年には人口が 16,615 とピークを記録したが、その後一貫して減少を続けている。2011 年 4 月の時点で、人口は 8018 である。地域の過疎化と高齢化の進行が著しい。

「自然や地域の文化・歴史を生かした生活を自ら作り、その中で地域全体を博物館として、そこから資源を発見し、学習してまちづくりに活かしていく」という目的で、1989 年朝日町在住する西沢信雄を中心として、教員や役場職員、農協職員、農民など様々な分野の人々によるエコミュージアム研究会が作られた。

当時、朝日町の町長または委員も自然と共生するエコミュージアムのまちづくりという考えや活動に積極的なサポートを提供した。第 3 次朝日町総合開発基本計画の中心的な基本理念として、エコミュージアムの理念が取り入れられ、「自然と人間の共生」が強調され、2011 年までもう 20 年になった。第 4 次朝日町総合発展計画では、「自然と人間が共生し、しっかりした暮らしを築くエコミュージアムのまち」という基本理念が掲げられた。第 5 次朝日町総合発展計画ではエコミュージアムの言葉が出てこなかったが、総合計画担当者によると、エコミュージアムの理念は町の活動の中に根付いているという。

エコミュージアム研究会は、当初理念についての学習が中心だったが、徐々に実践に移り、シンポジウムとパネルディスカッションを行うようになった。さらに、2000 年にはエコミュージアム研究会が NPO 法人朝日町エコミュージアム協会となった。2011 年時点で、理事長と副理事長を含む 11 人の理事と一人の監事、16 人の正会員の合計 28 人で構成され

ている。協会の会員は小中高校の教員、写真家、会社員、朝日町役場役員、農業経営者、団体職員などである。協会の収入は、大きく分けて、会費・入会金、事業収入、助成金、寄付金の4つである。自己資金の割合が比較的が多いと分かった。

活動は大きく分けて運営事業、調査事業、普及事業の3つに分類される。運営事業は運営に関する業務である。調査事業は地域資源の発掘やそれに精通している住民への聞き取り、文献収集など調査研究に関する事業である。普及事業は展示事業、資料事業、催事事業、サテライト事業、案内事業、広報事業の6つに細分化されている。

朝日町でエコミュージアムの発足のきっかけになったのは、町にある自然を生かし、共生できるような観光地づくりを目指し始まった1988年の朝日山麓家族旅行村「朝日自然観」の建設であった。その後、町づくりを町だけに任せるのではなく、町民自らも関わり、何か協力しようという気運が盛り上がり、自主的に空気神社を建設した。豊かな自然と空気に感謝するモニュメントはブナ林の中に、5メートル四方のステンレス板を鏡に見立てて置いたものである。春夏秋冬の風景がこの鏡に映り、空気への感謝をより強く感じさせてくれる。そして、6月5日の国連環境デーを「空気の日」にすることを決め、毎年この日に空気に感謝する催しを行うことになった。

エコミュージアムコアセンター「創遊館」は2000年6月に完成され、町の文化会館、中央公民館、図書館、エコミュージアムセンターなどの機能を持った複合施設である。エコミュージアム活動によってこれまで蓄積されてきた資料が閲覧でき、さらにタッチパネル式の検索システムによって、エコミュージアムに関する情報を得ることができる。

朝日町エコミュージアムには、16のサテライトが存在する。それは、①朝日連峰エリア、②朝日川エリア、③空気神社エリア、④佐竹家エリア、⑤ハッ沼エリア、⑥樺平の棚田エリア、⑦豊龍神社エリア、⑧館山エリア、⑨世界のりんご園エリア、⑩沢内エリア、⑪杉山と長谷地エリア、⑫五百川峡谷エリア、⑬大沼浮島エリア、⑭秋葉山エリア、⑮大隅遺跡エリア、⑯朝日町ワイン城エリアである。

これらの16のサテライトエリアでは、それぞれの地域資源の活用や維持・管理の取り組みが活発に行われている。全てがエコミュージアムを強く意識して進められているものではないものの、地域住民は主体的に参加している。つまり、エコミュージアム活動の理念が実質的に地元住民に浸透していた。こうした地域づくり活動は、過疎化を食い止めるまでは行かないが、地域住民の帰属意識や結束を強め、人口流出を緩和している。

以上のように、朝日町のエコミュージアムによる地域振興活動は行政側の様々な政策により支えられながら、NPO法人朝日町エコミュージアム協会の主導により、地域住民の参加に加えてから今まで活発に行われている。行政あるいは住民による支援がないなら運営主体の民間非営利組織であるNPO法人朝日町エコミュージアム協会の活動は順調に行われる

訳ではないと考えられる。さらに、協会の中に専門性を持つ人員及び協会と各サテライトの連携も重視すべき要素である。

(3) 日本におけるエコミュージアムの現状と課題

1) 現状

井原満明（2006）によると、日本におけるエコミュージアムの分類は大きく4世代に分けられる。第1世代は、担い手の少なくなってきた地域資源が無数に存在する農村地域の再生である。これは中国の農村地域における生態博物館と似ていると考えられる。第2世代は、産炭地域、鉱山及び公害地域の再生である。第3世代は、元々地域の文化や歴史を担っていた中心市街地の再生である。第4世代は、流域や鉄道を軸とした、交流・連携という形のエコミュージアムである。

吉兼秀夫（1997）は日本における生態博物館の現状について、以下のように述べている。

エコミュージアムは行政と住民による二重入力で展開するが、現在展開しているところは官主導と民主導が相半ばしている。また、コンサルタントや研究者など外部からのコンセプト注入型も見られる。官主導は展開が早い但し頓挫・息切れする可能性を秘めている。民主導は着実タイプであるが展開がゆっくりという特性が見られる。山形県朝日町のように両者のパートナーシップ型になるまではそれぞれ試行錯誤が必要であろう。

2) 課題

大原一興（2004）はこれからの日本におけるエコミュージアムの課題について、2点を指摘した。1つ目は、「型への固執」という点である。エコミュージアムは本来、自由な形態を持ち、地域の特性に応じて様々な姿を見せるものなのだが、特にそれを無理に1つの型やモデルにはめようとする。エコミュージアムの概念が日本に導入されてからまだ日が浅く、エコミュージアムに対する考え方は未だに多くの誤解が蔓延し混乱した状況である。また、環境づくりに携わる立場からすると、このことは土地の個性を否定し思考停止を導いてしまう重大な過ちのように思われる。2つ目は、「博物館学との関係」という点である。日本における多くのエコミュージアムが抱えている課題は、博物館や博物館学との関わりが薄い点である。これらのように、いずれにしてもエコミュージアム関係者と博物館や博物館学との全面的に良好な協同活動が生まれにくいのが実状であることを指摘している。

第二章 中国における生態博物館の発展と実践

第一節 中国における生態博物館の導入

1. 生態博物館の理念の導入の経緯

「生態博物館」という言葉は中国博物館学会の安来順先生によって1985年に中国に紹介された。中国の博物館界は「生態博物館」に接触し始めたのは1986年の時期だった。中国国家博物館研究員である蘇東海はジョルジュ・アンリ・リヴィエールらのエコミュージアムに関する文章を『中国博物館』という雑誌で掲載していた。蘇東海の努力により、生態博物館の中国での実践を助力した。そのため、彼は「中国生態博物館の父」と呼ばれている。1986年から中国初の生態博物館の建設準備が始まる1995年までの10年間の間に、『中国博物館』は国際エコミュージアムを宣伝する最前線となった。

2. 中国における初の生態博物館の誕生

1995年4月、ヨーン・イエストルム、蘇東海と貴州省文化庁文物科科长・胡朝相を中心とするプロジェクトチームは、貴州省で生態博物館の候補地の選定が始めた。

実際の調査と検討を通じて、プロジェクトチームは梭戛が自然と伝統文化が比較的色濃く残っていると考えて、第一の候補地に指定した。「箐苗」ないしは「長角苗」と呼ばれている苗族（ミャオ族）が梭戛郷の12の高原の村に居住しており、外部との交流のない自給自足の農村生活を送っている。また、織布、染織、刺繍も家庭内で行われているという（蘇 2002）。そして、梭戛を含め、隆里、堂安、鎮山はそれぞれミャオ族、漢族、トン族、プイ族を代表する4つの生態博物館を建設する提案が提出された。その後、国家文物局と貴州省政府はこの提案を批准し、「中挪1995年至1997年文化交流項目」に組み込んでいた。1997年10月23日に、当時中国国家首席だった江沢民はノルウェー国王ハロルド五世と北京でプロジェクトに調印した。3年の実施計画により、1998年10月31日に中国初の生態博物館は正式に誕生した。

3. 生態博物館の運営原則である「六枝原則」

梭戛生態博物館を設定するにあたって、中国の博物館学者は、ノルウェーの博物館学者とともに、生態博物館発展の9つの原則、つまり「六枝原則」を考案した。

曾士才（2016）によると、以下9箇条は以下の通りである。

(1) 村民が彼らの文化の真の主人公である。彼らはその文化を解釈し、証明する権利を有する。

(2) 文化の意義及びその価値は、人々の理解とその理解の上に成り立つ解釈によってはじめて確認されるものであり、文化に対する理解は必ず強化されなければならない。

(3) 生態博物館においては、公衆の参与が極めて重要である。文化は共有される、民主的なすばらしいものであり、必ず民主的な方式で管理運営されなければならない。

(4) 観光と文化保護が衝突する時は、必ず後者に優先権がある。文化遺産となっている本物は売ってはいけないが、伝統工芸に基づく質の高い記念品の生産は奨励されるべきである。

(5) 長期的な視野に立った全面的な規律と調和が極めて重要である。長期的な視野から、文化そのものを損ねる短期的な経済的利益は必ず回避しなければならない。

(6) 文化遺産の保護は全体の環境保護と必ず結びつけなければならない。この分野では、伝統技術とその材料が極めて重要である。

(7) 観衆は敬意をもって自らの行為を行使する道徳的義務がある。彼らはルールに則った指導を受けなければならない。

(8) 生態博物館には1つの決まったモデルがあるわけではない。独自の文化と社会的条件と結びつけた特色あるものにしなければならない。

(9) 生活社区（コミュニティ）に生態博物館を設立するあたり、社会発展を促進させることが先決条件である。

以上の9つの理念は、梭戛生態博物館の「六枝原則」である。その中で、最も核心となる理念は「村民主体」と「保護優先」という2つである。

「六枝原則」の提出は現地の文化をより良い保護し、現地住民の主人公の地位をさらに尊重するためなのである。しかし、曾士才によると、「六枝原則」にある「文化保護」と「住民の幸福と平安の強化」は一見相矛盾するように見える。特に貧困地域においてはしばしば前者が後者の足かせになる恐れがある。実際生態博物館の運営状況を見ると、住民たちは参与し、自ら運営するのは難しかった。

第二節 中国における生態博物館の展開

1. 第1期生態博物館である貴州生態博物館群

1997年、梭戛生態博物館の資料信息中心の建設は着工し始めた。施設の建設及び展示品の収集のために、ノルウェー政府は無償で88万元を援助した。1998年10月31日に、資料信息中心の建設が完成し、開館した。

ノルウェー政府、中国博物館学会、国家文物局および省政府は約300万元を共同出資し、2002年に貴陽花溪鎮山布依族生態博物館を建設した。

「村が貴陽市の水がめである花溪ダム湖の湖畔にあることから、2002年に貴陽市建設局が200万元を支出し、汚水タンク、下水道設備を敷設し、民家の汚水をすべて処理するようにした。処理済みの水は公衆トイレや田畑の灌漑用水に用いられるようになった。生態

博物館に指定されたことにより、村内の民家や城壁、武廟の修復がなされたが、村への道路敷設、下水処理や電線の地下埋設など環境整備が実現したのも生態博物館の指定を受けたことによる効果だと言われている」（曾 2016）。

また、曾士才の論文によると、一部の村民が家族単位で民宿、飲食店を営んで収入を得ている。しかし、行楽客は湖畔に近い下寨に好んで行くため、上寨と下寨とでは収入格差が生じ、村内の和が壊れつつある。

貴州隆里古城生態博物館は中国とノルウェー共同で資金を集め、2001年に建設された。堂安侗族生態博物館は中国とノルウェーが共同で建設され、資料信息中心が2000年9月に開館した。

堂安と言うと、「棚田」という言葉がすぐ出てくる。中国最大のトン寨である肇興から車で10分くらいのところにあり、徒歩なら2時間くらい堂安まで到着できる。肇興に遊びに来る観光客は時間があれば、よく地元人に肇興から堂安までの棚田を眺められるハイキングコースを勧められる。堂安を尋ねる観光客の中にほぼ棚田の写真をとるプロのカメラマンである。堂安村ではまだ商業化されていなく、レストランや旅館が整備されていない状況にある。さらに、周辺のトン族の村々は同質性が高いため、堂安は比較的人気が低い。2001年、生態博物館の接待室が建設され、黎平県政府は館長と副館長を任命した。しかし、館長と副館長は平日は県の役所に出勤したため、生態博物館に対する関心が薄かった。そこで、黎平民族師範学校の卒業生を招聘し、彼に管理の仕事を任せた。一年間経たないうちに、その卒業生はやめた。

その後、中国西部文化工作室が誘われ、黎平県内のトン族文化の収集と整理という仕事を任された。中国西部文化工作室は地元のトン族文化の専門家やプロのカメラマンなどを誘い、大量の資料を収集できた。

2008年、県政府は生態博物館の管理を民間の世紀風華に委託した。元々無料で見学できたのがその後入場料は一人10元になった。生態博物館が「利益追求」の機関になったことは人々の自由に見学する権利及び地元住民の生態博物館に参加管理する権利を奪う行為だと思う。一方、文化記録の作業も停滞状態になっている。

90年代貴州省で始まった生態博物館は第1期中国生態博物館群と呼ばれている。

2. 第2期生態博物館である広西生態博物館群

広西チワン族自治区は少数民族の集まり住んでいるところで、貴州省の南に位置している。東は広東省、東北は湖南省、西北は雲南省、南はトンキン湾に接している。広西の三面は山地に囲まれ「広西盆地」と呼ばれている。熱帯、亜熱帯の気候のため、豊富な降水があり、多様性を持つ動植物に恵まれた。水産資源や鉱物資源は非常に豊かで、特にマン

ガンは中国一の埋蔵量を誇っている。2010年の時点において、広西の総人口は約4600万人で、チワン族、ヤオ族、ミャオ族、トン族、マオナン族、回族、プイ族、ジン族、水族、イ族が居住している。民族によって文化も異なるため、広西ではそれぞれの文化や習慣を有している。

1998年から中国初の生態博物館が貴州省で設立された後、生態博物館という概念は広西に導入された。広西の第十次五か年計画の中に、生態博物館の建設により、いかに文化遺産を保護するかについての検討が組み入れられた。広西チワン族自治区の「広西モデル」の生態博物館は、第2期中国生態博物館群となった。

2001年、広西政府の文化関係の官僚らで構成された視察団は貴州の梭戛生態博物館に訪問した。

貴州文化庁長官覃溥（2013）によると、「この視察で我われは、中国的な特色を持つ生態博物館建設の選択と実験の可能性および将来的な見通しを目にすることができた」と話した。また、視察団は2年余りかけて、「“中国の特色”があり、広西の実情にも合う生態博物館の建設モデルを全力で追求し、そのことを通じて伝統的な民族文化の保護の緊迫した局面に有効な方法で対応しようとした」。

貴州省への実地調査や各分野の専門家による共同研究の後に、広西政府は百色市靖西県旧州、河池市南丹県里湖、柳州市三江侗族自治県の3ヶ所を生態博物館の候補地として選出し、生態博物館の建設を完成した。

3ヶ所の試行地域では一定の成果や経験を得た後、引き続き桂東賀州市の蓮塘鎮客家围屋生態博物館、桂中融水ミャオ族自治県のミャオ族生態博物館、桂北靈川県靈田郷の長崗嶺商道古村生態博物館、桂南東興（市）の京族三島生態博物館、桂北龍勝（各族自治県）の龍脊チワン族生態博物館、桂西那坡（県）の達文黒衣チワン生態博物館、桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館の7つの生態博物館が建設された。

10ヶ所の民族生態博物館と広西民族博物館の組み合わせは広西民族生態博物館の「1+10」プロジェクトを構成した。「1」は広西民族生態博物館を指し、広西生態博物館群の「龍頭」であり、10ヶ所の中心的な存在である。

広西民族博物館は、それぞれの民族生態博物館が撮影、録音、保存、放映したものを集約する機能を持った高度な設備を配備し、それぞれの生態博物館が長期にわたる文化の記録、展示、ネットワークへのリンク、学術研究を行えるようにしている（覃 2013）。

また、10ヶ所の民族生態博物館は、すべて広西民族博物館の長期の作業と民族文化研究の基地として、広西民族博物館に対して収蔵品と研究成果を不断に提供し、広西民族博物館の館内所蔵品と展示内容を豊富にする。

広西生態博物館の設立は、積極的に広西地区の豊かな民族文化資源を保護している。第1期貴州生態博物館群の実践経験を参照した上に、革新的な「1+10プロジェクト」を作り出した。広西博物館と各分館はお互いの長所と短所を補い合え、連携し広西省の民族文化遺産の保護、研究、伝承、展示の使命を果たした。

3. 第3期生態博物館である浙江生態博物館群

貴州省では生態博物館が建設された後、広西チワン族自治区では広西民族生態博物館「1+10」プロジェクトという実践が始まった。また、内蒙古と雲南省でも生態博物館が設立された。これらの生態博物館はいずれも中国の少数民族地域に建設されている。その後、中国の第十二次五か年計画では、農村文化の多様性の保護、文化のアイデンティティの強化および文化の持続可能な発展はより大きな注目を集めた。そして、中国の東部沿岸地域である浙江省の安吉県では生態博物館を設立するという新たな試みが始まった。

「生態博物館の所在地は通常、貧困地域、開発が立ち遅れている状態にある少数民族地区である」という人々の認識を打ち破った（潘 2013）。安吉生態博物館は新たな挑戦と見なされ、第3期中国生態博物館としてされている。

安吉県は浙江省の湖州市に位置し、「中国一の竹の郷」、「白茶の郷」とも呼ばれている。貴州省の生態博物館群は省内で異なったところでそれぞれ生態博物館を建設した。それに対し、広西生態博物館群は広西民族博物館をプラットフォームとし、外部に伸展させ、10箇所の分館を繋げているという形である。安吉生態博物館は貴州省生態博物館と広西生態博物館の経験を重ね、現地の状況を結びつけ、「1つの中心館（資料信息中心）、13のテーマ館、26の村落文化展示館」という組み立てを採用した。

これまで設立された生態博物館との違いは、安吉生態博物館の建設により、保護内容が製茶、家具製造までのような民族文化以外の文化に拡張した点だ。また、安吉生態博物館群の中心館以外、生態博物館の諸施設が安吉全県に分布している。このようなイノベーションは安吉生態博物館の運営管理に新しい命を注入したと思われる。

第三節 中国における生態博物館の特徴

生態博物館が中国においていかに存続、発展を遂げるかに対して、蘇東海は「生態博物館は、種がヨーロッパのものであるにも関わらず、中国の土地にまかれ、咲いた花が中国の花となる」と述べている（蘇 2000）。すなわち、生態博物館は中国に適応していくためには、中国の特色のある道を探らなければいけない。

中国における生態博物館の特色に関する見解を以下のようにまとめた。

1. 少数民族地区である開設地

中国の初期の梭戛生態博物館は殆ど少数民族の農村部に位置している。こうした地域では民族文化は破壊され、徐々に失われている背景のもと、少数民族文化に対する保護はもうすでに看過できない状態になった。例えば、中国初の生態博物館に選ばれた六盤水市六枝区梭戛郷は、外部との接触の少ない山村ゆえに開設された。外部との接触が少ないからこそ、伝統文化が良好な状態で継承されている。一方、このような山村における経済成長は遅れている。貴州、広西、雲南、内蒙古における生態博物館もほぼ少数民族地域に建設された。

2. 文化代理期—政府主導

第1章で述べたように、北欧や日本のエコミュージアムの管理・運営は行政、住民が一体となり、住民も積極的に参加した。それに対し、中国の「六枝原則」の中の最も核心となる理念は「民衆による参与と、民主的管理方式を用いる必要がある」である。しかし、中国初の生態博物館の建設から今までの20年間の間に、ほぼ上意下達というモードで運営管理してきた。村民達の教育程度が低く、管理の責任を負うことは十分にできず、生態博物館の日常管理に参入するのは難しい（潘 2006）。蘇東海の言葉によると、現在のところ中国における生態博物館の運営管理には「文化代理」（文化代行）期が存在している。

3. 重大な使命—文化保護と経済発展

蘇東海（2008）は中国において生態博物館の設立は、地域の貧困を救済することが第一の任務で、衣食などの基本的な生活における問題が解決できたら、地域の住民は自分の文化を保護しようと働く。

ここから見ると、生態博物館は文化を保護する以外、経済発展への願いも非常に強いのである。

第三章 貴州省における生態博物館の理念の実践

第一節 隆里古城の概況

1. 隆里郷の地理・歴史概要

隆里郷は錦屏県に所属し、黎平県と錦屏県の中間に位置する。山に囲まれた盆地にあり、周辺の森林資源が豊富で林業が盛んでいる。隆里郷には隆里村を中心に、龍里司村、王家榜村、付瓜山村、龍吾寨、華寨の六か村がある。14世紀の明代初期に、隆里村で勢力のあったトン族・ミャオ族の連合軍の討伐のため、明の始祖である朱元璋は息子朱楨を王として貴州省に派遣した。朱楨が30万人の漢族の兵士を率いて反乱を平定した。1385年、明代の軍事制度の1つ衛所制度（兵農一致の軍事編成制度。112人を百戸所とし、10の百戸所を千戸所、5つの千戸所を一衛とし、指揮使が統轄した）のもとで、隆里郷は駐屯地として、隆里千戸守御所が設置された。漢族の兵士は屯田兵として駐在し、平常農業を営むかわり軍事訓練を行い、隆里を防衛していた。清代の順治15年、衛所制度が廃棄され、軍戸は民戸になり、兵士たちは農民となった。古城の軍事機能は大いに弱められ、徐々に漢族が暮らしている伝統的な村落になった。

隆里古城は明代洪武25年に建てられ、天災のため破壊され、何回にも修復された。現在の隆里古城は明代に建てられ、清代に修復された。古城全体を取り囲んでいた城壁は今は一部しか残ってない。東門、北門、南門、西門は良い状態で保存されている。古城は大通りによって区切られている。

地元の隆里人の祖先の多くは安徽省出身あるいは江西省出身で、民家の様式も安徽省の独特の「徽州建築」の特徴がある。それは、白壁、黒瓦、馬頭壁（段階状の切妻壁）である。民家の外側はレンガで固めて、内部は杉木で作れている。

2. 隆里古城の文化資源、観光目玉

隆里古城は「漢文化孤島」として呼ばれており、古城内には城壁、城門以外、内部の宗祠、蜈蚣街、古井、龍標書院（2012年修復）、観音廟（2012年修復）、城外の王昌齡墓、状元橋、懷伯亭、状元碑などが保存されている。蜈蚣街というのは、南門大街とも言い、長さが93メートル、幅が8.5メートルの通りのことである。この名前の由来には諸説がある。最も面白い説は「脚踩吳三桂（吳三桂を足で踏みつける）」である。蜈蚣（むかで。ウーゴンと発音する）は吳公（ウーゴン）のことを指す。これは自分たちを軍戸から民戸の身分に貶めた吳公（ウーゴン）つまり吳三桂に対する恨みから、幾千万人が幾千万年にわたり彼を足下に踏みつけるために作ったといわれている（曾 2016）。王昌齡は唐代の詩人として有名であり、隆里の県尉に左遷させられた。隆里人は彼の功績を記念するため、王昌齡ゆかりのもの上記のものを建てた。

第二節 隆里古城生態博物館の成立

1. 生態博物館の設立の経緯

1995年4月、生態博物館の補講地を選定するプロジェクトチームは隆里古城を視察した際に、隆里古城の街並みが非常に特別だと気づいた。町の通りは十字型に交わるのではなく、全部丁字型に交差している。なぜかという、それは中国では「十」という字の発音が「失」の発音と近く、「失」は「失火」、「陣地を失う」の意味があり、一方、「丁」は「人口が大いに増える」の意味があるからである。それ以外、プロジェクトチームは自然環境、古城の歴史、物質文化遺産、非物質文化遺産などの観点から考察し、隆里が漢文化を色濃く継承していると考えた。生態博物館の設立は地域住民が自文化に対する意識を高め、地域の経済の発展にも寄与するものと期待された。

2. 資料信息中心の運営管理及び生態博物館への住民参加

資料信息中心の構造

隆里古城の生態博物館の資料信息中心の候補地選定について、ノルウェー国家文物局副局長、貴州生態博物館プロジェクトの顧問であるダガーは、資料信息中心は村民のための施設のため、村民たちの文化活動センターと精神の家として、地域住民の生活の一部になるべきだと意見を述べた。最終的にこの意見に従い、古城内のもうすでに廃棄された映画館を候補地として決めた。この廃棄された映画館は古城の中心部に位置しており、北隣に祭りの開催場所である広場があり、資料信息中心の候補地として一番いいと考えられた。

資料信息中心は、三間取りの建物が手前から奥へ3つ並び、その間に中庭が2つある「三進両天井」（天井とは中庭のこと）の造りとなっており、隣接する民家や町並みと違和感のないものになっている。一階には生産道具や古城のジオラマを置いた展示室、事務室が、二階には視聴覚室、資料情報室、図書室、档案室（公文書室）、接待室がある（曾 2016 : 93）。

生態博物館には貴州省錦屏県文体広電旅遊局²（略称：錦屏県文広局）から派遣された幹部3人、女性解説員2人、村委員会の幹部1人がいる。解説員は資料信息中心のガイドを務める以外、掃除を委託されている。資料信息中心の鍵も彼女らに預けている。2012年以前解説員の給料は古城の入場料からまかない、2012年から隆里古城の入場が無料になったため、給料は県政府から支出するようになった。県からの3人の幹部は2018年の年初から任命され、任命してからずっと県で働いて、あまり隆里に来てない、生態博物館の事情

² 地方の文化、体育、放送メディア、娯楽関連の活動の管理、監督を行っている政府部門。

にも詳しくないという現状である。村の幹部は生態博物館への参加が少なく、ほとんど無関心である。調べた限り、現在のところ文化記録の作業は停滞している状況である。また、玩龍灯、画花臉（隈取りを描く）といった非物質文化（無形文化財）を体育の授業に取り入れた、年間2回だけ行う。若者たちが出稼ぎで村を離れ、伝統的なものに接する機会が少ないので、彼らが戻って来たときを利用して、年配者に手ほどきしてもらっている。

解説員の一人である龍安香は隆里生態博物館の開館以来、人員の入れ替わりが頻繁にあるなかで、解説員として長年続けている唯一の人物である。しかし、龍安香によると、仕事と収入の安定という点に惹かれ、今まで働いているという。龍安香は踊ることが大好きで龍が舞う「玩龍灯」という伝統芸能を自ら学んで、常に地元の龍踊りチームと一緒に外出して出演する。

また、隆里では漢文化を継承してきたため、漢族の伝統舞「漢舞」の演出は少なくない。龍安香はリーダーとして、村人を集め、ダンスの振り付けまで考え、村人と一緒に練習を重ねてから、隆里郷を代表して県の行事などに出演したケースが多い。伝統文化の継承という面から見ると、龍安香は「玩龍灯」や「漢舞」ができることに誇りを持っており、他人に教えるのも熱心である。将来は隆里ではダンス教室を開き、地元の子供に漢舞を教えるのが夢だという。

3. 観光開発の現状

生態博物館の設立前に、隆里古城の観光開発はもうすでに始まっていたが、宣伝力がなかったため、観光客は少なかった。生態博物館として指定された後、県政府は観光開発に力を入れるようになっていく。

観光活動を促進するため、県政府は地元住民が家庭を単位に接待戸になることを奨励し、一定程度の補助金を出した。地元住民はさらに多くの補助金を得るため、盲目的にベッド数を増やした。その結果、宿泊環境への配慮が低下し、観光客は歴史ある雰囲気の中で静かな時間を過ごすことができなかったという。

筆者は2017年と2018年の実地調査で接待戸に「宿泊できますか」と尋ねたら、「もう宿泊は提供しないです」と全部断われた。なぜかという、接待戸は人気がなかったため、徐々に経営できなくなった。この点から見ると、県政府の接待戸の設置には盲目性があるとわかった。

隆里では最も特色のある伝統活動は「玩花臉龍」である。「玩花臉龍」は北宋時代から既に800年余りの歴史があり、明代の屯軍の兵士がそれを隆里に持ち込み、清代になると最盛期を迎え、今まで継承されている。「玩花臉龍」が様々な龍舞の中で格別に注目されて

いるのは、全ての龍舞の踊り手に京劇の俳優のように臉譜（隈取り）を描くことである。そのため、「玩花臉龍」と呼ばれている。

この伝統活動は旧暦の正月に行われ、隆里古城を盛り上げる大事なイベントである。それ以外にも、唱漢劇（漢語の芝居）、迎故事（移動芝居）などの活動もある。

2004年に生態博物館が開館した後、更に多くの観光客を誘致するため、5月の労働節と10月の国慶節に合わせ、「隆里古城舞龍狂歡節」と名付けられた祭りが開催され始めた。

2016年1月に、錦屏县政府は湖南省華旅グループと契約を結び、契約期間40年の間に湖南省華旅グループが隆里古城の観光に関する企画立案及び推進を行うこととなった。县政府と民間企業が連携し、将来隆里は5A級観光地と「中国最美郷間古城」を目指したいとしている。さらに、観光業を発展させ雇用を増やし、地域の農業をはじめとする伝統的産業の活性化及び文化産業、サービス産業の発展も促進することを目指している。

華旅グループは2010年に設立し、2014年12月に会社の名前は「湖南華旅文化旅遊産業發展股份有限公司」に変更した。11の子会社を持っており、主に旅遊風景区の運営管理、観光活動の企画、コンサルティング、文化創意商品の開発、観光経営マネジメント人材の育成などといった事業に取り組んでいる。县政府と契約した後、隆里古城で「錦屏華旅隆里文化旅遊發展有限公司」が設立された。本稿では単に「華旅」と言った場合は、この「錦屏華旅隆里文化旅遊發展有限公司」のことを指している。

華旅は個人、家族、小グループを対象の伝統文化の体験型観光に重きを置いている。これまで行われた大きな観光イベントは「隆里古城舞龍狂歡節」、「隆里古城の632年の誕生日」がある。それ以外の観光活動としては、学生を中心とする隆里の漢文化を体験する修学旅行、サマーキャンプや企業の社員旅行をメインにしている。

華旅は伝統的な儒教教育を施す私塾学校と連携し、4歳から15歳までの児童を対象に、漢文化の課程及びゲームを設けている。2018年7月から8月にかけて、湖南省の長沙市の普賢国学館は隆里で16日間のサマーキャンプを開いた。子供たちが国学の書を朗読し、隆里の伝統文化を体験し、有意義な夏休みを送るとというのが目的である。

一日のスケジュールは以下の通りである。

表2 サマーキャンプのスケジュール

時間	活動
06:00-06:30	起きる、早朝ジョギング
06:30-07:30	朝の読書
07:30-08:00	朝ご飯

08:00-09:30	「孝経」、「大学」、「老子」などの経典の朗読
10:00-11:30	古代詩の朗読
12:00-14:30	昼ご飯、昼休み
15:00-18:00	隆里古城非物質文化遺産の体験（画花臉〔隈取りを描く〕）、編草龍（藁で作られた草龍、頭の上につける）、龍舞）
18:00-19:30	自由活動
19:30-20:30	シャワーを浴びる、洗濯する
20:30-21:30	夜の自習
21:30～	おやすみ



写真1 子供たちは「画花臉」を体験している（写真は華旅が提供してくれた）。

第三節 地摺の概況

1. 地摺の地理、行政概要

地摺村は貴州省の黎平県に所属している。黎平県は貴州省南東部に位置し、湖南省と広西チワン族自治区に接して、面積は4,441平方キロメートルである。トン族、ミャオ族、漢族、ヤオ族、水族などの少数民族が住んでおり、総人口は53万人で、そのうち70%がトン族である。トン族の数は全国で最も多い県である。黎平県は非常に賑やかで、バスターミナル外の通りは非常に渋滞しており、バスの移動も困難な状態であった。黎平県で地摺行

きのバスに乗って、地扨に入る前に、約5キロメートルの山道があり、急カーブの連続で車酔い状態になりそうになった。地扨トン族寨（村）の四方は山に囲まれ、村内には透き通った河が流れている。中国最大のトン寨と知られている肇興（2018年春節聯歡晩会の副会場の一つ）と比べると、地扨の名声はかなり低い。しかし、トン寨の規模を言うと肇興次いで2番目であり、「中国伝統村落」³第一弾リストに組み入れられた。

2. 地扨村の形成

現在、地扨では呉、李、段、徐、劉などの苗字がある。そのうち、呉氏の人口は98%以上を占めている。地扨の呉氏の出所は2つがある。

1つ目は、外から移住してきたのである。寨老である呉世徳によると、呉氏の祖先は昔江西省吉安市泰和県に居住しており、飢饉のために貴州省に逃れてきた。その後、地扨が肥えた土地であり、住み心地のいいところと考え、地扨に移住した。

2つ目は、他の苗字から呉に変更した。「昔、現在の維寨のところではミャオ族の人々が住んでおり、汪、区、陽姓の人々がいた。彼らは匪賊に攻撃され、反抗できないため、我々トン族に加入したいと求めた。当時、寨老たちが相談した後、もし彼らが呉姓に改姓できれば、地扨のトン族に加入することができるということになった。そのため、これらのミャオ族の人々は呉姓に改姓し、地扨のトン族と一緒に暮らした。

呉世徳の話によると、やむを得ない改姓をした人もいたが、改姓により村の一員になることを通じて、つまり苗字の統一を通じて、アイデンティティと結束力を強化し、一緒に侵略に抵抗するということであった。これは地域に対する帰属意識を表していると考えられる。

3. 地扨トン族の生産活動、日常生活及び文化習俗

伝説によると、トン族の祖先は地扨に移住した後、勤勉に農業に取り組み、人口がだんだん増えてきて、1300戸に発展してきた。激増した人口を分散するため、地扨の人口を5つに分け、茅貢、臘洞、羅大、登岑にそれぞれ700戸、200戸、100戸、100戸を移住させた。地扨村は「千三侗寨」と呼ばれている。毎年の旧暦の正月初七から正月十三の間の一日に、「千三節」という祖先祭祀の祭りが行われている。茅貢、臘洞、羅大、登岑の村人も全部地扨に集まり、祖先祭祀を行う。

³ 国家住宅都市農村建設部（住建部）は「かなり早い時期に成立」、「伝統的資源が豊富」、「歴史・文化・科学・芸術・経済的価値を備えている」などから考察し、村落保護を目的として、中国国内の伝統村落・村庄に関する調査が全国規模でスタートして、中国伝統村落を選定することになった。

地攄は亜熱帯にあり、標高差が比較的小さい。地元の気候風土は水稻の栽培にあっている。トン族は昔から稲作を本業として生活してきた。田植えを始める春、村人は鯉の稚魚を水田に放っておき、稚魚が水草などを食べ、水稻と一緒に大きくなっていく。地元の村人は水稻耕作と魚の養殖を中心に独自の農業生産方式を発展させてきた。

表3 地攄村の一年間の農業活動と日常活動及び祭りの一覧表

旧暦	農業の生産活動	日常活動及び祭り
三月	種子からの育苗、荒起こし	三月三祭り、打粳粳（糯米を蒸して臼でついて餅にすること）、清明祭
四月	荒起こし、田植え、稚魚を水田に放す、唐辛子の種子を植える	四月八祭り、烏米飯を食べる
五月	田植え、肥料を施す、水の管理、サツマイモとジャガイモを植える	五月五、粽粳（端午の節句に、もち米、燻製した豚肉、赤い豆などで作った粽）を食べる
六月	あぜ草刈り、水の管理	六月六祭り、布を染める
七月	水田で魚をとる	焼き魚を食べる、腌魚（鯉などのなれずし）を作る、布を染める、伝統的な手すきの紙を作る
八月	収穫	
九月	収穫	
十月	白菜、大根、チシャなどの野菜を植える	出稼ぎ、布を染める、伝統的な手すきの紙を作る、十月平安祭り
十一月		出稼ぎ
十二月		出稼ぎ労働者の帰郷。打粳粳
一月		春節、親睦を深めるための訪問行事。「千三祭」、闘牛、トン劇の上演。
二月	植え付けや緑肥の準備	親睦を深めるための訪問行事

村の有形の文化資源としては、伝統トン居（3階建ての木楼）、鼓楼（集落が集会場所として建てた木組みの塔）、風雨橋（屋根のついた橋）、村門、劇台（芝居の舞台）や涼亭（雨泊まりや休憩のための東屋）などがある。トン族の建築物の中で、観光資源として鼓楼と風雨橋は最もトン族の特色を代表するものである。無形の文化資源としてトン劇、トン族大歌、製紙技術、刺繍、伝統祝日などがある。

第四節 地捫人文侗族生態博物館の成立

1. 成立の経緯

中国初の民営生態博物館は黎平県政府の許可の得た上に、香港明德グループが出資し、館長である任和昕が推進役になって建設された。

以下は、生態博物館の成立の経緯について、任和昕が語ってくれた内容である。長くなるがそのまま引用する。

私は元々ジャーナリズムを専攻し、貴州テレビ局で働いた。1996年、南方日報会社に就職し、経済関係部門に所属した。その後、偶然のチャンスで香港のコンサルティング会社に転職し、最初にインターネットに関する仕事をやっていたが、その後海外の企業にコンサルティングサービスを提供し始めた。2002年くらいの時、私が所属していた会社の中に、音楽を研究している一人のアメリカ人コンサルタントがおり、彼は西南中国の農村における「ワールド・ミュージック」を見つけることを望んでいた。すなわち、まだ手が加えられていない状態の音楽のことである。私達はよく「オリジナル音楽」と呼んでいた。彼は私が貴州出身と知っていて、私を訪ねて来た。そこで、彼を連れて貴州の農村へ収集に行った。その後、少数民族音楽のアルバムをいくつか作成し、海外でも多くの注目を集めた。この頃、江沢民前国家主席が提唱した「西部大開発」戦略を耳にするようになった。「西部大開発」は一体何を開発するのだろうかとても興味を持った。1つは、鉱物と地下水をはじめとする地下資源である。もう1つは、人文資源と自然資源を含めた地上資源である。当時、私達は新しいビジネスを開拓すべきだと考えていた。それは持続可能な農村観光開発である。そのため、最初は音楽をきっかけに、私たちは貴州の農村部に入り、最後は持続可能な農村観光開発を行うために、特にトン族観光の持続可能な開発を行うために、ここに来た。2003年、トン族観光の持続可能な開発という考えを黎平県政府に提案し認められた後、黎平県政府の招待に応じ、2003年から2033年までの30年の契約を結んだ。この30年間、私達は農村の保護、利用及び発展問題に注目し、特に持続可能な観光開発に力を入れる。観光はどうすれば、持続可能なものになれるのか。ちょうどその時期貴州省各地で生態博物館が建てられ、私は「生態博物館」という概念に出会った。エコツーリズムと生態博物館の2つの概念は両方とも保護、利用及び発展を強調し、双子の兄弟になれるの

ではないかと考えた。そのため、堂安生態博物館を利用し、エコツーリズムを導入し、文化の保護と観光とをお互いに呼応させられるのではないかと思いついた。

しかし、1つの問題が出てきた。生態博物館はノルウェーと貴州省政府との協力プロジェクトのため、ノルウェー人が来たら、香港側の人々がここで働いていることに気づき、すぐに疑わしいものになった。その時、ノルウェー人は香港の人々が資本家で、政府の顧問の名義で観光開発をし、村民と観光開発の果実を奪い取ってしまうのではないかと思いついた。それから、2004年2つ難しい問題が出てきた。1つ目は、黎平県政府は君たちの考えが良い物だが、お金もないから私達はできない。それよりも君たちが一つのモデルを作ったと言った。したがって、私達の顧問としての仕事は変わっていった。元々有料の顧問サービスだったが、私たち自身が場所を見つけ、モデルを作り、最後に顧問サービスを提供することになった。2つ目は、貴州省文化庁とノルウェー側が私達に疑惑を抱き、堂安で引き続きエコツーリズムの開発を行うことは無理だった。

正直にいうと、なぜ生態博物館を作るのか。私は文化を守ろうという感情を持っているのではなく、社会責任感や、故郷への絆があるのでもない。それはただの偶然だけだ。

多くの曲折を経験し、最後に私達は地擘を選んだ。4つの理由がある。まず、あまり知られていない、外界との接触が少ない村である点。そして、村人は外部者を受け入れる心がある点。すなわち、観光開発を期待している。また、優れた文化遺産に恵まれている点。最後は、地方政府の態度も積極的である点である。

私達は多くの村を訪ね、茅貢の地擘は面積が大きいということに気づいた。そして、また二回目に地擘を考察に行った時、2千人くらいの村人が寨門から橋まで並んで私達を歓迎する場面が強く印象に残っていた。非常に大事なことは、茅貢鎮政府は土地取得を含めて様々なサポートを提供してくれた。以上の理由で、地擘を選んで生態博物館のモデルを作ることになった。

任和昕の説明によると、地擘で生態博物館を建設するのは明德創意グループの最初の考えではないとわかった。明德創意グループは最初は地元政府の観光コンサルタントとして、コミュニティの資源を利用してエコツーリズムの開発に力を入れていたが、どういう形で実現するかを考えた結果、最後に「生態博物館」という形でエコツーリズムの考えを具体化することを決めた。

開館した際に、地擘生態博物館は公益的または非営利型の文化機関と位置づけ、主に4つの機能を発揮することが期待された。1つ目の機能は、村社会の歴史、文化、建築、技術、自然の変容を記録する展示センター、研究センター、資料センター、対外連携センターになることである。2つ目は、コミュニティにおける伝統文化、手工芸などを伝承し、保護する教育センター及び地元住民の文化活動を行う場所になることである。3つ目は、大学とい

った学術機関の研究基地になることである。4つ目は、観光者を接待する宿泊地と手工芸品販売する場所である。

開館して13年以来、1つ目と3つ目の機能は予定通り展開されたが、2つ目と4つ目の機能は予定通りにはうまく行かなかった。筆者は村民との雑談を通じて、生態博物館の理念を正しく理解した人がほぼいないということがわかった。多くの人は生態博物館に無関心の姿勢を示した。

地元の小学校と連携し、「春苗芸術団」を設立し、毎週土曜日に博物館で小学生たちに侗族大歌⁴に教える以外、文化の伝承活動はほぼないという状況である。ここから見ると、生態博物館はコミュニティの教育センター、住民の文化活動の場所になっていない。

また、任和昕は最大限に地域の自然環境を保護し、訪れる人をできるだけ多く増加させないため、専門家、学者や学生以外に、農村の風景、文化に興味を持ち、深い農村体験を追求するような教育レベルの高い、また経済的に豊かな人々が訪れることを目指し、エコツーリズムを行うことにした。そして、大勢の観光客が押し寄せることは避けたいと考えた。博物館の宿泊料金は一晩一ベッドが300元（約5000円）であるが、このような貧しい村では非常に高いと思われる。多くの観光客といった外部者は価格を尋ねた後、立ち去る場合が多い。観光客数を一定程度に抑制しつつ、宿泊料金から得た利益が生態博物館の運営管理金になったが、村民は経済利益をもらえなかったため、不満が出てきた。観光者を接待する宿泊地と手工芸品を販売する場所になるという機能はあまり実現できていない。

2. 資料信息中心の運営管理

表4 資料信息中心の人員構成と職務

氏名	教育レベル	職務	性別	民族	年齢	仕事内容
任和昕	大学	副館長	男	漢族	52	生態博物館の人事管理、対外連絡、活動企画、ガイド

⁴ 侗族大歌というのは、中国トン族の民間の多声部合唱音楽の総称で、スタイル、曲調、内容により、鼓楼大歌のほかに、叙事大歌、礼俗大歌、児童大歌、戯曲大歌などを分けられている。

呉勝華	中学	副館長	男	トン族	55	文化の保護・ 伝承 主に村の日常生活の記録(カメラで村内の冠婚葬祭について写真、映像をとる)
呉章仕	専門学校	ボランティア	男	トン族	53	文化の保護・ 伝承 村の日常生活の記録とトン族大歌の伝承
朱麗梅	大学	副館長	女	漢族	25	外部者の受付、記録した映像、写真のデータベースの管理
呉玉東	専門学校	アルバイト	女	トン族	27	財務の仕事を担当する
呉桃愛	小学校	アルバイト	女	トン族	30代	客室の清掃、野菜の栽培、お茶の栽培
呉美劇	小学校	アルバイト	女	トン族	30代	スタッフや泊まってい

						る外部者に 食事を提供 する
呉新美	小学校	アルバイト	女	トン族	40代	スタッフの 部屋の清掃 を含む衛生 管理、野菜の 栽培、
呉占科	小学校	アルバイト	男	トン族	50代	野菜の栽培 と資料情報 中心内の備 品などの修 理
呉顕強	不詳	アルバイト	男	トン族	不詳	運転手

地捫生態博物館は7棟の木造建築によって構成され、全ての建築物が廊下で連結されている。伝統的な建築様式を採用し、全体として違和感なく地域の環境空間に溶け込んでいる。

生態博物館の入り口に入ると、目に入った一つ目の廊下は「子供博物館」である。ここでは、たくさんの寄贈された本が置いてあり、児童書は特に多い。そのため、平日に学校が終わった後、学生たちはここで宿題をしたり、本を読んだりして過ごしていた。後は、任和昕の事務室、食事エリア、宿泊エリア、パフォーマンスホールと情報収集センターである。情報収集センターは副館長呉勝華の事務室であり、背の高い本棚では、家庭ごとに作ったファイル、トン族に関する映像、書籍などが置いてある。デスクの隣は大きなデスクトップパソコンがある。呉勝華によると、日常に記録された文字資料、写真や映像など全てこのパソコンに入力する。

地捫生態博物館のドキュメンテーションセンターは規模が大きく、宿泊エリアが占める面積が大きい（大体30室。一般の観光客用ではなく、後述する特定の利用客や館の取り組

みに関係する学生や学者しか接待しない)。1つの展示室以外、他の展示ものはほとんどないという状態である。

館長が地捫に長期駐在し、村や生態博物館のことに詳しい。地捫生態博物館が今まで運営し続けてこれたのは、任和昕個人の力で人脈、知識を利用した結果だと考えられる。任和昕は元々ジャーナリスト、観光会社のコンサルタントをしていたが、2003年から政府の招待に応じ、「文化保護と農村発展」の顧問を担当している。ここから見ると、任は様々な人脈をもっていることがわかる。他のスタッフの中に村人は少なくないが、入れ替わりが頻繁で、教育レベルも低い。つまり、現在の時点では村人自身が生態博物館を運営管理するのは難しいと考えられる。

以下に、任和昕の職歴を時間順に整理した。

表5 任和昕の職歴

1996年以前	ジャーナリズムを専攻し、貴州放送テレビ局で働いた
1996年	南方日報会社に就き、経済関係部門に所属した。 その後、香港明德創意グループに転職した
2003年	「香港明德創意グループ」という会社の子会社「中国西部文化生態工作室」の秘書長を務めた。 黎平県委（中国共産党県一級委員会の略語）、政府の招待に応じ、「文化保護と農村発展」の顧問を担当している
2005年	地捫侗族人文生態博物館の館長
2013年	国家文物局の「地捫・登岑トン寨伝統村落整体保護利用」という模範項目の村の駐在専門家を担当する
2016年12月	第十回黎平県政協常委委員（政治協商会議常務委員会委員の略語）に選ばれた
2017年	北京民智文化發展戦略研究院の執行院長

生態博物館は日常的な作業、すなわち文化保護・伝承の面での作業は、主に3点がある。

まず、2003年から各大学と連携し、系統的に、全面的に、周辺の9個の村の物質文化遺産、非物質文化遺産を記録した。成果としては8000枚近くの写真、10万字余りの文字資料、10時間の録音、ビデオの資料などがある。現在撮影の作業は、村人である呉副館長に任せられている。2年間くらい香港城市大学と連携し、村人の口述史（村人から直接話を聞き取り、記録としてまとめること）の取材、作成をしていた。例えば、村の老人たちが村の物語を

語るとか、シャーマンが自分の物語を語るとか、様々な内容を記録している。この作業はもう10数年続けた。

そして、地扨生態博物館は地扨小学校と連携し、「春苗芸術団」を設立した。地扨小学校の児童（大体30人くらいという）が毎週土曜日に博物館に集まり、呉章仕は彼らにトン族の歌を教える。

2015年から、生態博物館の主な仕事は仕事ファイルと家庭ファイルの2つの部分に変更した。仕事ファイルとは村民委員会と連携し、村人の生活や生産活動などに関する様々な情報を収集して、記録をすること。家庭ファイルとは地扨の742戸（2015年時点）の各家庭の状況の作成すること。現在は何十戸が増え、800戸近くになった。

生態博物館への住民参加

インタビュー対象の呉勝華（1963年生、トン族。地扨村出身）は州ランクのトン劇の伝承人⁵、村の寨老⁶であり、元地扨の村共産党支部書記⁷、会計など21年間村の幹部を務めており、2017年3月から地扨侗族人文生態博物館の副館長を務めている。

生態博物館では主に文化保護と伝承の仕事を担当している。普段コミュニティの日常や冠婚葬祭について文字と映像による記録の作業を行なっている。それ以外、トン劇の収集整理と創作にも力を入れている。

少し長くなるが、村との関わりについて次のように語っている。

村幹部として1つ重要な仕事はコンクリート造の家を作りたい村人を説得することである。村の外へ働きに出ていた村人は約6割を占めており、主に広東省と浙江省に行った人が多い。村人は外でお金を儲けたら、地扨に戻ってコンクリート造の家を作った。なぜなら、それはコンクリート造の家が「お金持ち」の象徴だからである。そして、トン族の家屋は木造のため、火災を起こしやすい。2006年、模寨の病気にかかったある老人は夜に暖をとる時、気づかないうちに、掛布団が火鉢に落ちた。不幸なことに、その夜の風が強かったため、火が勢いよく延焼した。この火災は模寨、維寨、芒寨に波及した。60戸の人々

⁵ 州級文化伝承人：中国の非物質文化遺産の伝承者は各レベルの判定の基準により、国家ランク、省ランク、州ランク、県ランクの四つのランクに分けられる。呉勝華は貴州省黔东南苗族トン族自治州の州ランク文化伝承人。

⁶ 寨老：村落のリーダーであり、村人に好かれ、信頼されることによって自然発生的に選出される。時には絶大な司法権力を握る者であり、時には用事の際その伝統社会運営の取りまとめ役である。

⁷ 中国では、村レベルの共産党支部は中国共産党の基礎組織であり、書記という役目がある。村共産党支部書記は選挙により、村の共産党全員に選出され、党務を執行する。

は一晩家が失われた。その後、さらに多くの村人は木造の家による火災に恐怖心を持つようになり、火災などに強いコンクリート造の家を作ろうという考えが強くなった。ただし、村ではみんな血縁関係を持っている親戚だから、これからもみんなと付き合うので、説得するのが難しい。

生態博物館との関わりについて、以下のように語っている。

ここは辺鄙な村だから、投資家はずっとこんなところに興味がなかった。1999年に、任和昕が所属する香港の会社は地捫に来た時、村で一時大騒ぎされた。「投資者はこんなに辺鄙なところが気に入ったのか。もし家から出ないだけでお金を稼げれば、一番いいじゃないか」と当時私はそう思った。そして、私は村の老若男女に呼びかけ、村の入り口で任和昕らを歓迎していて、必死に拍手した。当時彼らから地捫で生態博物館を建設したいと聞かされ、私たちみんなこれはまたとないチャンスだと思った。2003年から村民委員会は生態博物館の建設に村民から土地の収用をした。2005年生態博物館が開館した。

当時生態博物館は固定された運営方式がないため、最初任和昕は生態博物館の管理を村民委員会に任せた。その時、村長である私は博物館でマネージャーとして三ヶ月間兼務していた。観光客に民族芸能を披露する1つの文芸隊が成立した。2005年の観光客は多く、主に県政府側が接待するお客であった。当時の村の党支部書記は観光客の食事を担当していた。ほとんどの村の村幹部はそこで兼務しており、現在の副館長である呉章仕も私の紹介で博物館に来た。一ヶ月間大体2万元の利益がもたらされた。しかし、2006年の火災の後、観光客が急に少なくなった。そして、館長は厳しくようになり、博物館で兼務するなら、毎日博物館に来るべきだと思っていた。村の仕事も多く、毎日博物館に来れるわけがないだろう。そのため、私たちは博物館での兼務をやめた。

次に、生態博物館が村へ及ぼした影響や村人の生態博物館への態度を尋ねた。回答の要点は主に3点ある。

1つ目は、開館した後、地捫のインフラの着実な整備を進めていたことである。例えば、地捫生態博物館が地捫を宣伝したからこそ、地元政府は地捫を重視するようになり、道路を敷設する際に、資金を投入した。

2つ目は、村の衛生環境などを改善したことである。生態博物館は毎年10万元（165万円）を出し村の衛生環境を改善する。またテレビを購入し鼓楼の中に設置した。村民たちは毎晩鼓楼テレビを見たり、雑談したりして過ごしている。

3つ目は、地捫に知名度をもたらしたことである。生態博物館の成立により、名声が高くなり、資金の投入が多くなった。

実地調査が行なわれた際、村人が地捫生態博物館をどれだけ認識しているのかを明らかにしたいため、20人くらいの村人に「地捫生態博物館はどういう機関ですか」と聞いた。以下は代表的な答えである。

表6 村民の生態博物館に対する認識

インタビュー対象	個人の状況	生態博物館とは何か
呉世徳	80代。地捫村の総寨老	その生態博物館は香港の企業が設立し、政府もそれを支持している。生態博物館の設立により、私たちは地捫の観光活動の振興をもたらすことを期待していた。しかし、10数年も経ったが、期待が外れた。
呉漢慈	58歳。地捫小学校の数学の先生であり、民宿を経営している。	それは村全体を保護する博物館である。博物館は地捫小学校と連携し、「春苗芸術団」（トン族大歌を学ぶ組織）を設立したが、10年も経って何の変化もない。
呉冬花	30代。村で売店を経営している。	観光活動を行うところだろう。来ている人も少ないし、あまり意味がない。
陶昌宇	32歳。地捫人と結婚し、地捫で生活している。よく広東や江蘇へ出稼ぎに行った。	そこで地捫の伝統的なものを扱っている。生産道具、染めものや刺繍などあるよ。
呉蘭東	23歳。貴州大学の四年生。専門は建築である。	春苗芸術団で3年間トン族大歌を学んでいたが、ほぼ基本的な歌で、勉強の進度が遅かった。この前、2回生態博物館の活動に参加した。1つは“尋找老物件（古いものを探す）”である。もう1つは生態博物館の手伝いをし、手工芸人に関する個人情報電子入力である。生態博物館が建てられても、何も変化がないと思った。その後、生態博物館が地元文化に関する収集、整理及び日常の記録を行なっていることを

		知り、生態博物館の存在は意味があると思う。村民は最初に生態博物館に期待すぎたからこそ、今は失望するのだろう。
呉前華	40代。1年の大部分を浙江省で出稼ぎに従事している。	いつも外で出稼ぎをしているから、よくわからない。

聞き取り調査を通じて、多くの村民は生態博物館に無関心の姿勢を示しただけではなく、生態博物館への理解も多少ずれていた。村民は生態博物館の設立により観光開発に期待したが、文化保護といったことを無視した。しかし、地捫における20代を中心とする若い世代は普段伝統文化に触れるチャンスが少なくなった一方、大学教育を受けたため、伝統文化への重視度が高く、生態博物館への評価も比較的高い。

トン族といえば、「歌の民族」と言われ、特に「トン族大歌」が有名である。トン族大歌は声域が広いという特色があり、男女の歌隊がよく鼓楼で面と向かい歌唱（ハーモニー合唱）を行うという形式の歌である。

一方、トン劇の創始者である呉文彩の出身地は地捫村の隣村の臘洞であるため、茅貢鎮ではトン劇がさらに有名だった。呉勝華は州ランクのトン劇の传承人であるため、趣味の一つはトン劇の創作だと語った。例えば、地捫では一年に一度祖先を祭るため「千三節」と呼ばれている盛大な祝典が行われる。2018年の「千三節」では、呉勝華が創作した「精準扶貧」⁸というトン劇がその日のトン劇の一等賞を取った。

「エスニック観光によって潤うのは民族文化の演出と宣伝を成功させた一部分の人々のみであり、その機会をもたない人々の間では脱伝統化のプロセスが急速に進行している」という鋭い指摘がある（瀬川 2003）。調査を通じて、民族文化を利用し利益をもらえる人はごく少数であり、多くの若者達は出稼ぎに出て行ったので、かつてのトン族大歌やトン劇といった伝統的な文化への関心は急速に薄れつつある。

⁸ 精準扶貧というのは、まず、細かく正確に貧困扶助の対象を特定すること。そして、対象の貧困状況によって担当者や支援策を定め、確実に効果をあげることを確認する。さらに、対象の情報を細かく正確に管理する。これは2013年11月、習近平国家主席が湖南省西部を視察した際に出た言葉。

3. 観光活動の現状

現在地攄生態博物館が特に力を入れているのはミーティング、インセンティブ、コンベンション、イベントといったマイスの誘致・開催である。生態博物館側は団体、学会、協会に会議開催の部屋、宿泊、飲食及び観光情報などを提供し、収入を得ている。

また、生態博物館では親子の農村体験のテーマツアーを行っている。農村体験のテーマツアーは地攄を中心にトン族地域の文化体験及び学びを行なう観光活動である。具体的に、3歳から6歳までの子供がいる家族を対象に、田舎体験の機会を提供する。北京からの団体のため、普段は大都市に生活し、田舎の風景や、少数民族の文化に触れるチャンスがなくて、子供にとっていい体験になるという考えから、このような活動が始まった。生態博物館は彼らに宿泊や食事を提供する。以下はテーマツアーの概要である。

表7 テーマツアーの概要

日時	2017年8月6日～11日、6日の午後の5時頃に地攄に着き、12日の朝に北京に帰ることになっていた
料金（宿泊、食事、榕江駅から地攄までの往復交通費、保険費、撮影費、活動材料費、子供用のチームTシャツなど）	6泊7日の滞在で、家族を単位に、大人1人、子供（0～4歳）1人：9880元、大人1人、子供（4～7歳）1人：10200元；大人1人が増えると、追加料金4680元、子供（0～4歳）が増えると、追加料金3080元、子供（4～7歳）が増えると、追加料金3680元

新たな試みである「茅貢計画」

茅貢郷は貴州省黔東南自治州黎平県に所属し、黎平県の西部に位置する。2014年、合併により、茅貢郷の管轄地域は15の行政村から9つの行政村になった。さらに、2015年12月、貴州省政府は茅貢郷から茅貢鎮への変更を批准した。茅貢鎮の管轄下にある9つの行政村中、6つの行政村は伝統村落であって、自然・文化資源に恵まれた地域であるという。そのため、茅貢政府は茅貢鎮の村々の伝統文化を観光資源として利用し、観光開発しよう

という狙いがあった。政治、経済、地理の中心になる茅貢鎮は5日に1回の「趕集⁹（定期マーケット）」が開かれるが、地攄生態博物館の館長である任和昕らは鎮の周辺に点在する村落が観光開発から悪影響を受けないようにするため、「茅貢計画」を政府に提案した。

「茅貢計画」というのは、茅貢鎮の建設を中心にして、周辺のトン族の村の発展を促進させる計画である。地攄村もその村の中の一つだという。この計画の中に、2つの重要点が含まれている。

まず、特定の村に訪問者を集中させないことである。なぜなら、観光客が押し寄せれば、経済発展を遂げる代わりに、地域住民の生活が壊されるかもしれないからだ。もう1つは、観光開発による村落間の発展の不均衡を避けることである。

具体的な計画は、ホテル、飲食店、土産品の小売店をはじめとする観光施設の他、「百工市集」（手工芸品販売の場）や「創客中心」（外部の芸術家のスタジオとアパート）のような空間を作り上げ、周辺の村人を茅貢鎮まで惹きつけ、創客（外部の芸術家）たちと協力して、手作りの製品及び農産物を文化的観点からパッケージ化する。このようにして、村の人々は日中には茅貢鎮で働き、夕方には静かな村に戻る。村人の生活は観光開発から大きな影響を受けない、かつ将来の観光開発の利益をできるだけ均等に享受できるようにと考えている。郷愁を求める都会の人がこの地でゆっくりと商業化されてない農村生活に回帰でき、都会に憧れ、城愁（都会への憧れ）を持っている農村の人も茅貢鎮で「都会生活」を体験できる。

地元政府はこの提案を受け入れ、その後、任和昕の紹介を通して、現在の茅貢文化創意小鎮の運営管理を陳国棟が率いているチームに任せた。

陳国棟の専門は建築で、修士課程及び博士課程を日本で修了した。郷土の建築家として、中国の郷土に現存する建築を研究し、新たな価値を持つ木造建築に興味があり、中国の農村部の地域創生に取り組んでいる。

彼は京都で「無名營造社」という建築事務所を運営しながら、広東市で他の人と共同で「観内外」という教育機関を運営管理しているという。「無名營造社」の理念は地域の民俗建築の知恵を発掘、伝承し、木造建築の新しい可能性を探り、新しいアイデアを持つ民族建築を創出するということである。無名營造社のメンバーは12人（2018年6月時点）がおり、設計や建築を専攻とする20代の若者が多いという特徴を持っている。「観内外」は設計者、主に大学生向けに、プロの設計者を養成するという目的で設立した。

⁹ 中国農村部では路上の一角が数日おきにフリーマーケットを開くこと。マーケットは主に地域の間位置し、交通便利のところであり、村人は周辺からそこで集まり、商売をする。

2017年6月に、陳国棟は帰国し貴州省黔東南の茅貢鎮で無名營造社の事務室を開いた。その後、創業パートナーの一人として「一畝地」郷創創意文化有限公司を設立し、創意に富む郷村実践に力を入れ始めた。会社の事業内容は主に3点がある。まず、郷村の文化創意資源に対する整理・体系化することである。また、農村の伝統文化に創意工夫を加え、文化の商品化及び域外への輸出することである。そして、農村と都市を結ぶ場所として、お互いに交流し、理解することである。会社であるが、彼らのことを「茅貢郷創チーム」と人々は呼んでいる。

なぜこのチームに任せているかということ、私が調査した限りでは、2つの理由がある。1つ目は、建築出身の陳国棟は日本での留学経験が長く、博士課程の際には数多くの日本の農村で実地調査を行っている、日本の農村に関する情報を参考しつつ、中国の農村のあり方を考えることができるのではないかということ。2つ目は、茅貢郷創チームメンバーは殆ど20代の若者であること。彼らの多くは専門が建築、設計となり、また民俗文化に興味のある人々のため、彼らに任せることで、若者が持っているアイデアを発揮できるようになることである。逆に、もし経験を有する専門企業に任せると、他の地域と同じように、過度な商業化に走り、風景及び伝統資源を破壊する危険性があることは想像に難くない。

現在、茅貢計画は、主に3つの役目がある。それは、「文化生産」、「空間生産」及び「製品生産」の3つである。まず、「文化生産」というのは、茅貢鎮の管轄に属する9つの行政村の文化資源を紹介する展示を行うことである。例えば、キュレーターである左靖による「米展」、茅貢郷創チームによる木組構造建築の展示、堂安生態博物館の館長による百工館（各村の手工芸品の展示）などがある。「空間生産」というのは、もうすでに廃棄された60、70年代の穀倉、供銷社⁵（購買販売組合）の売店などの国有資産を建築家の創造活動によって活性化させ、再創造することである。例として、かつての国有穀倉はトン族の写真、地方手工芸品、農産品などを展示する「茅貢糧倉芸術センター」に改造された。最後に、「製品生産」は2つの部分に分けられる。一つは、茅貢が投資した農産物加工品の生産工場の建設。各村から高品質の農産物を回収し、文化的観点からパッケージ化してから、都市部に販売する。もう1つは、購買販売協同組合の売店の改造を通して、「百村百工センター」の建設。「百村百工センター」は「百工館」（各村の手工芸品の展示）、「百工学堂」（手工芸品の伝承館）、「百工坊」（手工芸品の製作所）、「百工市集」（手工芸品販売の場）の4つによって成り立っている。

陳国棟らたちは都市青年階層を招待し、農村回帰の活動を発起している。創意と熱意を持つ青年たちの実践を通じて、都市と農村の格差を縮め、お互いの交流と価値の結合を促進し、農村部の地域振興に貢献したいという目標を持っている。

一畝地郷創

表 8 一畝地郷創の業務内容

業務内容	具体的な活動
百村百工	<p>1、各村落を訪ね、竹細工、染織などの手工芸品を収集し、大都市で展示会を開催して伝統文化を域外へ輸出する</p> <p>2、百村学堂は非物質文化遺産の伝承人と連携し、伝統工芸の課程を開設し、多くの人に伝承していく。</p> <p>3、芸術家やデザイナーの創意工夫により、伝統工芸は創意に富む付加価値のある商品になる。</p>
百村特産	米、酒、油、茶を中心とする食品の生産、パッケージング、販売
百村学堂	子供、大学生、設計士向けの教育課程
百村芸術	音楽祭、芸術祭のような活動を通じて、農村地域に新たな活力を与える
百村交流	学者、村民、芸術家、デザイナーなどを招待し、自然資源、文化資源をテーマとする調査、出版、展示会などを行い、地元の文化を掘り越しながら整理する。
百村漫遊	<p>1、農村地帯の少数民族の生活や伝統文化を深く理解するスタディツアー</p> <p>2、会社の社員旅行、団体旅行</p>

茅貢郷創チームは彼らの茅貢鎮での実践活動を「新上山下郷¹⁰」と呼んでいる。「新上山下郷」はさらに多くの中国における都市の創意青年層を地方の農村に誘い、彼らのアイデ

¹⁰ 「上山下郷」運動とは、文化大革命期の中国において、毛沢東の指導により、都市部の青年層に対して、地方の農村で肉体労働を行うことを通じて思想改造しながら、社会主義国家建設に協力させることを目的とした思想政策である。

ここで、この言葉を使い、「新」をつけ、新しい意味を与えた。

アと行動を通じて、都市と農村の格差を縮減し、中国の農村の新しい可能性を掘り起こそうとしている。

その中の一つの実践は「茅貢週末」という活動である。週末の一泊二日の体験項目を設け、農村に興味のある建築家、設計士、学生などを対象に、茅貢でリラックスしながら、地元の伝統文化を体験し、進行中のプロジェクトを見学してもらい、貴重な意見や感想を述べてもらう。

表9 「茅貢週末」のスケジュール（2018年3月17日～18日の事例）

1日目	活動内容
12:00	榕江ターミナル駅に到着
13:00	茅貢鎮に到着し、茅貢公寓（マンション）に入居する
14:00	地扞侗族人文生態博物館を見学し、生態博物館の理念を理解する
16:00	現在陳国棟らが進めている郷村建築空間を見学する
18:00	宴会（トン族自家製の米酒を飲みながら、トン族大歌を観賞する
21:00	宴会終了
2日目	
8:00	朝ごはん
9:00	周辺の村を訪問する
11:30	茅貢に戻る
12:00	昼ごはん
13:30	交流会-郷村建設とその実践
16:00	帰路につく

現在中国の都市部では急速な経済発展が遂げており、農村部の発展スピードがやや遅いため、多くの若者が地元を離れて都市部へ流出してしまうことにより、地方の過疎化が深刻化している。

このような背景下において、陳国棟は「若者の農村離れ」という問題を意識し、「人がないと、特に若者がないと、活力のある農村になれない」と指摘した。また、「農村建設は農村のその場で行うことが大事だと思っていたが、農村の核心価値を域外へ輸出することが一番大事だ」と意識するようになった。

そのため、「新上山下郷」という実践は都市部の創意青年層を誘い、農村で豊かな創造活動を行うだけでなく、さらに多くの若年層を呼び込み、農村を体験させ、進行中のプロジェクトにおいて気楽に交流してもらう。

無名營造社

地元の鎮政府はすでに廃棄された建物を無名營造社に任せた。無名營造社はこれらの空間を改造し、いくつかの成果を出した。それは、茅貢郷創学院、茅貢郷創接待センター、茅貢木屋ホテル、地西旅舎とトン族木造建築技術伝習館である。

以下は、茅貢郷創学院とトン族木造建築技術伝習館を紹介する。

元々は供銷社（購買販売組合）¹¹の売店であったが、左側は6階建てのマンションで、右側は山であるため、普段光が入りにくい状態であった。無名營造社は建物の両側面に若干の大きな開口部を作り、採光を確保する。それに元々トン族の伝統的な木製の屋根をそのまま保存した上で、階段状の屋根に作り替え、日中は室内に光が差し込むようにした。

外部の建築家の再創造活動により、最大程度にトン族建築の伝統的な要素を保存した上で、創意工夫を加え、旧建築に新しい命を与え、継続的に使用するのである。このようなリノベーションも一種の文化保護の形式なのではないかと筆者は考える。

現在は教育基地として使用する以外に、地元の鎮政府の支援プロジェクトの一環として、地元の人のための就職オリエンテーションを行う場所としても指定されている。また、各種の会議の開催場所としても提供されている。



写真2 茅貢郷創学院の内部空間（筆者撮影）

¹¹ 農村における生産と生活の需要を満たすために設けられた商業機構で、生産用具・生活用品を供給し、農産物・副業産物を買上げる。

トン族木造建築技術伝習館

トン族木造建築技術伝習館には、「侗族木造建築展」（建設中）という常設の展示館がある。ここでは、トン族建築の完成までの流れや建築文化や知識を紹介する。そして、鼓楼、風雨橋といったトン族の代表的な建築を1/10のサイズで作成して展示している。

ここは外部の人々が見学し勉強する場所にもかかわらず、地元の伝統木造技術を持つ大工たちは外部の新木造技術を持つ建築家と交流する場所でもある。すなわち、伝統木造建築の思想と技術と、現代の建築技術の融合により現代の農村生活に適した木造建築が実現されつつある場所でもある。

近年流行っている民宿や観光開発と異なり、茅貢郷創チームは茅貢で伝統文化の展示といった設計作業や既存空間の再創造を行なっている以外、都市と農村を繋げている創意プラットフォームを立ち上げた。

自分らが現在行っていることの価値について、陳国棟は「学生時代から、よく農村に足を運び、様々な農村建築を見ていた。茅貢は私に1つのチャンスくれた。茅貢での実践は未来でどれだけの価値があるかまたどこまで歩いていけるのかまだ分からないが、私たちは自分の得意分野で最大限尽くしたい」。

終章

1. 本研究のまとめ

本研究では中国における貴州省の2つの生態博物館の事例として取り上げ、その現状を調査に基づき詳細に記述した。特に民営生態博物館を中心に、官営の生態博物館の1つである隆里古城生態博物館と比較しながら考察した。具体的には、その運営管理、文化保護及び観光開発に注目し、民営の場合の観光開発の特色や、生態博物館の理念の1つである文化保護が観光開発との関係を考察した。

本研究の第1章では、エコミュージアムの歴史背景と誕生した経緯、定義、伝統的博物館との差異について述べた。中央と地方の地域格差や地方分権主義の台頭の背景の下に、国土整備政策の実施をきっかけに、環境と人間の関わりを考えていく「エコミュージアム」が誕生したこと。エコミュージアムはコア博物館、サテライト、新たな発見を見出す小径（ディスカバリートレイル）などから構成されること。色々なものを収集して、パネル展示を行い、説明するようなコア博物館は中国でよく資料信息中心（ドキュメンテーションセンター）と言われること。中国の生態博物館は特にサテライトという言い方はしないが、例えば、官営の隆里博物館では昔の科挙の試験を受ける学校や民営生態博物館のトン族の太鼓を吊るしている鼓楼などがサテライトに当たること。エコミュージアムの理念が誕生した後、各地で実践し、自然遺産や文化遺産を保護するエコミュージアムだけではなく、地方都市の産業・文化・生活に関わる諸々の記憶を収集、保全するエコミュージアムも出現したことなどを述べた。

従来型の博物館はある意味でその中の収集品が元の脈絡の中から切り離されているから、本来のものと違い、ある意味で死んでしまったという感じである。それに対し、生態博物館は地域全体を博物館と見なし、自然環境、文化遺産だけではなく、そこで生活している人々の営みも博物館の一部として保護している。

そして、エコミュージアムの実践について、エコミュージアム理念の誕生地であるフランス、中国の生態博物館の建設に協力したノルウェー、また中国の近隣国である日本の事例を取り上げた。3つの代表的な事例から見ると、エコミュージアムの運営は行政、様々な民間組織といった多様な主体による協力が行われている。運営資金は多様な収入源を持っているという特徴がある。そして、一番重要なのは、地元住民との関わりが密になっていることだ。地域住民の参加のもと、観光活動が盛んに行われているとともに、文化遺産の保護も積極的に行われていることだ。

以上第1章で歴史背景、理念、実例といった面からフランス、ノルウェー、日本のエコミュージアムを紹介した。

第2章では、中国に視線を移し、中国における生態博物館の導入、中国初の生態博物館の誕生、生態博物館の運営原則である「六枝原則」と中国における実践例を紹介した。

生態博物館が中国に導入できたのは中国博物館学会の安来順と中国国家博物館研究員研究員である蘇東海の努力に負う処が大きい。生態博物館が設立される前、生態博物館の候補地を選定するプロジェクトチームが組織され、梭戛を含め、隆里、堂安、鎮山といった自然と伝統文化が比較的色彩濃く残っている場所を選定した。その後、生態博物館建設過程で、ノルウェー側は技術と資金の面から様々なサポートをしていた。梭戛生態博物館を設定するにあたって、中国の博物館学者は、ノルウェーの博物館学者とともに、生態博物館発展の9つの原則、つまり「六枝原則」を考案した。「六枝原則」の中で、最も核心となる理念は「村民主体」と「保護優先」という2つである。中国では「村民主体」という原則が非常に重視されているが、実践段階では、村民が主人公になることは難しいと確認した。

第2章の第2節では、第1期生態博物館である貴州生態博物館群、第2期生態博物館である広西生態博物館、第3期生態博物館である浙江生態博物館群の概況をそれぞれ紹介した。90年代貴州省で始まった生態博物館群は中国の最初の実践例であるが、運営管理を継続的に維持するのは難しい状況にある。その後建設された広西生態博物館群は第1期貴州生態博物館群の実践の経験を参照した上に、研究拠点としての博物館と実際の村とを有機的に結び付けた「1+10」というコンセプトを打ち出した。また、浙江生態博物館群は初めて漢族地域で設立され、貴州や広西の経験を踏まえ、「1つの中心館、13のテーマ館、26の村落文化展示館」という構成を取っている。貴州生態博物館群と広西生態博物館群は中国の初期の生態博物館として、生態博物館事業の幕を開けた。しかし、貧困地域である少数民族地域では地域住民は生態博物館の主人公になる素地を有していないことが明確になった。安吉生態博物館の開設地は中国東部の経済先進地であるため、住民の教育レベルや文化意識がより高く、生態博物館の理念に対する認識もより高いのだ。住民の参加度も高いが、住民が主人公になりえているかどうかは今の段階ではまだ言えない。

第3節では、以上書かれたことをまとめ、中国における生態博物館の特徴を整理した。ほとんどの生態博物館が少数民族地域で開設されていること、生態博物館の運営管理には政府主導という「文化代理」（文化代行）期が存在すること、生態博物館が文化保護と経済発展という使命を持つことという3点である。

以上のことから、第3章ではフィールドワークや文献研究を踏まえ、官営の隆里古城生態博物館と民営の地扨人文侗族生態博物館それぞれの地域文化、設立の経緯、資料信息中心の運営管理及び生態博物館への住民参加、観光開発の現状から考察した。

隆里は「漢文化の孤島」と言われ、漢文化を継承してきている。隆里古城生態博物館は中国とノルウェーにより設立された。生態博物館の運営管理は貴州省錦屏県文体広電旅遊局（略称：錦屏県文広局）が担当し、文広局から幹部3人を派遣した。また、女性解説員2人、村委員会の幹部1人がいる。しかし、派遣された3人の幹部はずっと県で働いているため、生態博物館の事情にも詳しくない。村の幹部は生態博物館への参加が少なく、ほとんど無関心である。政府主導かつノルウェーからの資金援助があるため、資料信息中心（ドキュメンテーションセンター）の中の展示空間がしっかりデザインされていて、展示物も充実している。

一方、文化記録という作業は停滞しており、地元の中学校は年間2回だけ体育の授業で非物質文化である「玩龍灯」を取り入れている。現地調査を通じて、地元の隆里古城舞龍狂歡節の開催状況を見ると、老若男女問わず、皆は積極的に非物質文化活動に参加していると感じた。

多くの村民は生態博物館への関心が薄い、民族文化に興味を持ち、生態博物館の活動に参加する人もいる。

2016年から、県政府は民間の観光会社・華旅と契約を定め、隆里古城の観光に関する企画立案及び推進をこの会社に任せた。華旅は個人、家族、小グループを対象の伝統文化の体験型観光に重きを置いている。これまで多くのところで行われたマストゥリズムと違い、漢文化を体験する修学旅行、サマーキャンプや企業の社員旅行をメインにして行われている。ここから見ると、民間企業は政府にはない強みを生かし、観光活動に新たな活力を与えた。

地捫村は全国で2番目の規模のトン寨で、自然景観や民族文化が色濃く伝承されているため、唯一の民間生態博物館がここで建設された。民間企業が主導しているが、館長である任和昕の果たした役割が大きい。運営資金は宿泊費、MICEの誘致・開催から得た収入、文化商品の販売などがある。収入が不安定であるが、官営生態博物館と比べると、収入源の多様化が進んでいる。新たな試みとしての地域開発は官営の隆里古城生態博物館と同じように、民間企業が参与したため、観光活動に新たな活力を与えた。

2. 全体的考察・今後の課題と将来展望

本研究では、民間型の生態博物館は民間企業が投資して設立し、運営管理を行うものを指す。それに対し、官営型の生態博物館は政府行政が設立し、運営管理するものを指す。

官営の生態博物館の状況を見てみると、まず、貴陽の人々は週末の行楽地として鎮山生態博物館に行き、食事をしたり、マージャンをしたりして過ごしている。そして、梭戛では年に1回、2回行われる大きな祭りにしか観光客が来ることがない。堂安の場合は、殆ど

棚田の写真をとる人だけが来るようなところである。隆里はわりと熱心にマスツーリズムを行っているが、地元への経済効果が現在のところ殆どない。

運営管理や観光開発からみると、2005年民営生態博物館が開館して13年以来、文化保護・伝承及び観光開発の面では独自の模索をしていることが明確になった。

その実践には以下の特徴がある。

運営・管理面では、まず、社会主義国家では民営生態博物館であろう、官営生態博物館であろう、運営・管理をうまくするために、政府の許可、支持をもらわなければいけない。また、地扨生態博物館は今まで運営し続けてこれたのは、任和昕氏個人の人脈と経験を利用した結果だと考える。任和昕がいなければ、生態博物館の運営も続けてこれなかったと想像できる。

文化財の保護面では、生態博物館では文化遺産や村人の生活などの日常的の記録を重んじている。「茅貢計画」の実践において、外部の建築家の再創造活動により、創意工夫を加え、旧建築に新しい命を与え、継続的に使用されるようになっている。これは一種の文化保護の形式と考える。

観光活動の面では、地扨は民営の強みとして、遊びだけではなく、様々な形でたくさんの人たちに参加してもらっているが、今後のさらなる可能性を秘めていると考えられる。

地扨の生態博物館の力だけにより、地域の経済的發展に影響を与えるのは非常に限られている。また、地域住民はまだ観光活動から経済的に潤ってはいない。しかし、貴州省における他の生態博物館と比べると、民営である地扨の方は、部分的にはあるが、住民が運営の主体になったり、種々の専門集団や個人が運営、企画に関わったりしており、観光形態でもMICEや体験型観光などユニークな取り組みを行っており、継続性、柔軟性を持っているといえよう。しかし、現在のところ、地扨侗族人文生態博物館は生態博物館のモデルになるとはまだ言えないでいる。

今後の課題

本研究は中国における唯一の民営生態博物館を対象に、運営管理の主体の管理や観光活動を考察した。文献研究、1回の事前調査と2回の現地調査から観察したことを分析、整理して以上の結果を得た。しかし、筆者の力不足で、いくつかの課題はまだ残っている。

1つ目は、データの収集である。地扨と隆里で実地調査を行なった際に、地元で多大なご支援とご協力を得た一方、全ての調査相手が必ずしも協力的とは限らない。さらに、地扨生態博物館はデータの収集と整理が不足しているため、資料信息中心への見学者の数、コミュニティの観光客の数が入手できなかった。また、博物館の毎年の収益額について、館長である任和昕は「博物館の都合で、言い難い」という理由で断られた。

2つ目は、継続的な考察である。地摺を含めた茅貢鎮を範囲とする「茅貢計画」という地域開発は未だ途上にあるため、地域への影響は測り難い。今後このプロジェクトに対する継続的な考察が必要だと考えられる。

将来展望

中国初の民営生態博物館の将来展望について、願いも込めて次の4点を指摘したい。

1つ目は、地域住民が自文化の独自性に誇りを持ち、自信を持つようになることを期待したい。

2つ目は、「政府主導」「文化代理」が一般的な中国において、民営ゆえに住民がもっと運営管理に参画し、真に主人公になることである。

3つ目は、行政だけではなく、民間企業、団体、地域住民などがもっと様々な方法で参与すること。

4つ目は、博物館の諸活動により、地域に利益が還元されることである。

生態博物館は西洋のポスト工業化の時代に生まれた概念が中国に導入され、発展途上国である中国の政治風土と社会環境に適合しながら、20年間の実践を積んできたが、今なお健全な成長と発展の道を模索している。文化保護と経済発展を両立させる有効な手段として、中国の農村地域に根付いていくのかどうか、模索はまだまだ続けられていく。

参考文献

日本語

- 新井重三（1995）『実践 エコミュージアム入門-21世紀のまちおこし』牧野出版
- 岩橋恵子（1996）「フランスにおけるエコミュージアム運動の歴史的展開とその特質」『鹿児島女子大学研究紀要』Vol.17 No.2
- 井原満明（2006）「日本のエコミュージアムの事例と展開課題」『東京学芸大学連続講演会 第3回』p68-77
- 大原一興（1999）『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会
- 大原一興（2004）「日本におけるエコミュージアムのこれまでとこれから」『財団法人かながわ学術研究交流財団年報』2003：75-82
- 瀬川昌久（2003）「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」、瀬川昌久編『文化のディスプレイー 東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』：風響社
- 曾士才（2016）「中国貴州省における生態博物館の二十年」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス 中国南部地域の分析から』p73-100
- 田林明、横山貴史、大石貴之、栗林賢（2011）「山形県朝日町におけるエコミュージアム活動による地域振興」『地理空間』4-2：111-148
- 日本エコミュージアム研究会（1997）『エコミュージアム・理念と活動-世界と日本の最新事例集』牧野出版
- 農村環境整備センター（1999）『北欧の農村地域におけるエコミュージアム調査報告書』社団法人農村環境技術研究 NO.46 社団法人農村環境技術研究

中国語

- 安来順（2011）「国際生態博物館四十年：発展与問題」『中国博物館』（專題：生態（社区）博物館）2011（Z1）：15-23
- 段陽萍（2012）「中国西南民族地区—不同類型生態博物館的比較研究」博士論文 中央民族大学
- 高紅艷（2009）「鎮山生態博物館文化生態旅游的深度開發」『景觀研究』1（5）：7-11
国際生態博物館
- 黄春雨（2001）「中国生態博物館生存与発展思考」、『中国生態博物館』3：2-9
- 潘年英（2006）「“変形”的文本—梭戛生態博物館の人類学觀察」『湖南科技大学学報』9（2）：104-108
- 黎平県人民政府ホームページ

<http://www.lp.gov.cn/e/action/ShowInfo.php?classid=2&id=2880> (参照 2016 年 8 月 20 日)

劉艷 (2006) 「生態博物館發展創新初探—以地擘侗族生態博物館為例」『淮海工學院學報』4 (3) : 53-55

劉渝 (2011) 「中國生態博物館現狀分析」『學術論壇』12 : 206-210

潘年英 (2006) 「“變形”的文本—梭戛生態博物館的人類學觀察」『湖南科技大學學報』9 (2) : 104-108

蘇東海 (2001) 「國際生態博物館運動述略及中國之實踐」『中國博物館』2 : 2-7

蘇東海 (2008) 「生態博物館的思想及中國的行動」『國際博物館』Z1 : 29-40

覃溥 (2013) 「現代社會的發展過程における少數民族文化保護・傳承を担う時代の責任と義務：中國「廣西民族生態博物館建設 1+10 プロジェクト」の實踐」『國立民族學博物館學術情報リポジトリ』109 : 23-41

謝菲 (2015) 「生態博物館社區發展實踐及其困境—基於意大利和日本生態博物館的思考」『三峽論壇』5 : 74-79

尹紹亭 (2009) 「生態博物館與民族文化生態村」『中南民族大學學報』29 (5) : 28-34

尤小菊 (2010) 「民族文化村寨中的非物質文化遺產保護研究—以地擘生態博物館為例」『貴州大學學報 (社會科學版)』28 (3) : 111-117

張曉松 (2000) 「生態保護下的長角苗文化—貴州梭戛生態博物館的田野調查及研究」、『貴州民族研究』1 : 112-122